

第一冊 読解と記述の第一歩

導入・基礎から標準へ

読むことは、答えを当てることだけではありません。本文の言葉を手がかりに、考えの道筋をたどり、自分の言葉で結び直すことです。

目次

第一章	変化と気づき	…… 3
第二章	「リサイクル」という言葉の内側	…… 12
第三章	言葉の力とその限界	…… 20
第四章	生成と学びの過程	…… 29
第五章	時間の「多様性」	…… 38
第六章	「許す」という行為について	…… 47
第七章	「科学的である」とはどういうことか	…… 56
第八章	公共空間のゆくえ	…… 64
第九章	「努力は報われる」のか	…… 72
第十章	人間とは何か——孤独とつながりのあいだで	…… 81

各章は、本文・設問・解答解説の順に構成している。任意課題と挑戦問題は、学習の進み具合に応じて取り組めばよい。

この冊子の使い方

一 まず本文を読む

分からない言葉があっても、すぐに止まりすぎず、何について、どのような順で考えている文章かをつかむ。

二 根拠の場所へ戻る

選択肢の印象だけで決めず、本文のどの言葉と合うかを確認める。記述では、使う要素に印を付ける。

三 解答欄を使い分ける

選択・短答は各問直後の欄へ記入する。記述欄は清書にも要点メモにも使える。ノートで解いてもよい。

四 解説で考え方を確かめる

正答だけでなく、「根拠」「解説」「誤答のずれ」を読む。自分の答えがどこまで合い、何が足りないかを見る。

五 記述は内容で比べる

模範解答と同じ表現でなくてもよい。必要要素が入り、本文の関係を崩さず、字数内に収まっているかを確認める。

※本文中の丸数字は、段落構成を捉え、設問・解説から参照しやすくするために編集上付したものです。

本文の一部ではありません。

自己採点では、全部できたかどうかだけを見ない。一つでも根拠を増やせたところ、言葉を具体的にできたところを、次の章でもっとチャレンジしよう。

第一章 変化と気づき

この章で身につける力 具体的な出来事から考えが広がる道筋を追い、本文の根拠をつないで短い答案にする。

① 春のはじまりを告げるように、通学路の公園でチューリップの芽が顔を出していた。私はそれを、ただなんとなく眺めながら通り過ぎた。特別な感情があったわけではない。ただ、「ああ、春だな」と思ったただけだった。

② その公園は、私が毎朝通る道にある。遊具もベンチも古びていて、特に目を引くようなものはなかった。ところが、ある日ふと、そこに花壇ができていることに気づいた。土はきれいに整えられ、チューリップやパンジーが並んでいる。色とりどりの花が風に揺れていて、そこだけがぽつと明るく見えた。「いつのまに、こんなふうになったのだろう。」

③ そう思ったとき、私ははっとした。毎日通っていたのに、土が入れられたときも、苗が植えられたときも、気づいていなかった。完成した花壇を見て、ようやく「変わった」と感じたのだ。けれど、変化は一日で起きたわけではない。誰かが少しずつ土を整え、苗を植え、花が育つのを見守って、今の姿になったのだろう。

④ 見ていたはずなのに、私は見ていなかったのだ。視界には入っていたかもしれない。けれど、その中で起きていた動きや、それを支えていた人の手には心を向けていなかった。

⑤ そのことに気づいてから、私は「変化」というものに興味を持つようになった。たとえば、自分自身のこと。最近、「大人っぽくなったね」と友人に言われ、私は少し戸惑った。でも思い返せば、考え方が少し変わった気がする。以前ならすぐ口にしていたことを、いったん飲みこんで考えるようになった。人の言葉をすぐ否定せず、まず聞いてみようと思うようになった。それは大きな変化ではないが、自分の中では、たしかに何か少しずつ動いていたのだ。

⑥ 変化は、突然やってくるものばかりではない。多くは、日々の小さな積み重ねの中で育っていく。けれど私たちは、完成した結果にばかり目を向けて、「それまで」の過程を見逃してしまいがちだ。誰かの努力や、思い悩んだ時間や、静かな決意。そうしたものは、結果だけを見ていても分らない。

⑦ 花壇について考えたことは、人について考えるときにも当てはまるのではないか。最近、前より少し静かになったクラスメイトがいる。以前の私なら「元気がないのかな」と思ってた終わっていただろう。でも、その静けさの中にも、まだ言葉になっていない迷いや考えがあるのかもしれない。表情に出ていなくても、その人の中では何かが動いているのかもしれない。

⑧ 私たちは「変わったね」と言うとき、その人の外見や行動の変化に目を向けがちだ。しかし、目に見えない変化もある。気持ちや考え、感じ方が、少しずつ変わっていくこと。花壇が完成する前に、土を整え、苗を植える人の手があつたように、人の変化にも、外からは見えにくい過程がある。

⑨ そう思えるようになると、まわりの景色が少し違って見えた。チューリップの咲く公園だけでなく、空の色や風の匂い、すれ違う人の表情の中にも、まだはつきりとは見えない変化の気配を感じるようになった。

⑩ 変化に気づくこと。それは、相手や世界に丁寧に向き合うことなのかもしれない。目立たないけれど、たしかにそこにある過程を想像し、すぐに決めつけずに受け止めること。そのまなざしを、私はこれからも忘れずにいたいと思う。

設問

問一 語句・表現

次の(一)(二)について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第四段落「見ていたはずなのに、私は見ていなかったのだ」の意味

ア 毎日公園を通っていたが、花壇があることそのものを一度も視界に入れていなかった。

イ 花壇を見てはいたが、変化の途中に注意を向けず、完成するまでその動きを意識していなかった。

ウ 花壇が作られていると知っていたが、興味がなかったため考えないようにしていた。

エ 花壇の変化には気づいていたが、誰が手入れしたのか分からなかったため、見ていないと思った。

(二) 最終段落「そのまなざし」の意味

ア 目に見える違いを素早く見分ける観察力

イ 相手の気持ちを自分の経験で決めつける見方

ウ 目立たない過程にも心に向け、相手や世界を丁寧に受け止めようとする見方

エ 周囲の変化から自分に役立つ情報を探し出す態度

解答 (1) [] (2) []

問二 文章の展開

本文の展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 公園の花壇の変化 | 自分自身の変化 | 他者の内面への想像 | 変化に気づく姿勢の
大切さ

イ 公園の花壇の変化 | 公園を整えた人への感謝 | 自分の努力の反省 | 地域活動への
参加

ウ 友人の言葉 | 自分の性格への不満 | クラスメイトへの心配 | 変化を避ける決意

エ 季節の変化 | 景色を観察する方法 | 人の外見を判断する注意 | 観察力を伸ばす提
案

解答 〔 〕

問三 抜き出し

筆者が自分自身の変化を振り返るきっかけとなった友人の言葉を、本文から9字で抜き出せ。

解答欄(9字)

--	--	--	--	--	--	--	--

問四 短い記述(45字以内)

筆者は花壇の体験から、自分がどのようなものを見落としていたと気づいたか。「結果」「過程」の二語を用い、45字以内で説明せよ。

手がかり 第三・第四段落を中心に、「何には気づき、何には心を向けなかったか」を対にする。

解答欄 直接書いても、ノートで解くときの要点メモにしてもよい。

問五 要約(70字以内)

本文全体を、筆者の気づきの広がり分かるように、70字以内で要約せよ。

手がかり 花壇での経験から、自分や他者の変化への見方がどう広がったかをつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の下書きにしてもよい。

任意課題 本文を踏まえて考える(70字以内)

身の回りで、あとから気づいた変化を一つ挙げ、その変化にすぐ気づかなかった理由を70字以内で書け。自分の経験が思い浮かばない場合は、身近な場面を想像してもよい。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一～第四段落 公園の花壇を、完成するまでの過程ごと見落としていたことに気づく。
第五・第六段落 友人の言葉から自分の変化を振り返り、変化は小さな積み重ねだと考える。
第七・第八段落 同じ見方を他者へ広げ、目に見えない内面の過程を想像する。
第九・第十段落 変化に気づこうとすることを、相手や世界に丁寧に向き合う姿勢としてまとめる。

問一 語句・表現

(一) 正答 イ

根拠 第三・第四段落の「完成した花壇を見て、ようやく」「視界には入っていたかもしれない」に注目する。

解説 筆者は花壇をまったく見ていなかったのではない。視界には入っていても、少しずつ進む変化や人の手を意識していなかったという意味なので、イが合う。

誤答のずれ アは「視界に入っていたかもしれない」と合わない。ウは意図的に考えなかったとする点、エは誰が手入れたかを論点にする点がずれる。

(二) 正答 ウ

根拠 最終段落では、目立たない過程を想像し、すぐに決めつけず受け止めることを「そのまなざし」と呼んでいる。

誤答のずれ アは目で見分ける力に狭めすぎている。イは「決めつけず」と反対である。エのよきな実用的な情報探しは本文の論点ではない。

☆自己採点の観点

- 語句だけでなく、その直前・直後の文と照らして選んだか。
- どこまで本文に合い、どこからずれるかを他の選択肢についても確かめたか。

問二 文章の展開

正答
ア

根拠 本文は、公園の花壇、自分自身、他者、最後の考えという順に視野を広げている。

解説 アは、具体的な体験から自分、他者、一般的な姿勢へ進む順序を保っている。展開を問う問題では、話題だけでなく順序とつながりを確認する。

誤答のずれ イの地域活動、ウの変化を避ける決意、エの観察方法は、いずれも本文の展開にならない。

☆自己採点の観点

- 各部分の話題だけでなく、筆者の考えがどの順序で広がるかを追えたか。
- 本文に出てくる語が含まれているだけで、選択肢を正しいと決めなかったか。

問三 抜き出し

正答
大人っぽくなったね（9字）

根拠 第五段落で、友人のこの言葉を受けたあと、筆者は自分の考え方や人の話の聞き方を振り返っている。

解き方 「友人の言葉」「自分の変化を振り返るきっかけ」という二つの条件を、同時に満たす箇所を探す。

☆自己採点の観点

- 本文と同じ6字を、余分なかぎ括弧を付けずに抜き出したか。
- 似た内容を自分の言葉で言い換えず、本文の表現をそのまま用いたか。

問四 短い記述（45字以内）

設問の意図 花壇を見たという事実と、変化の途中に心を向けなかったことの違いを、結果と過程の関係で説明する。

根拠 第三段落の「完成した花壇を見て、ようやく」と、第四段落の「動きや、それを支えていた人の手には心を向けていなかった」。

必要要素 ①完成した結果には気づいた。②そこに至る変化や人の手という過程を見落とした。

組み立て方 「結果だけを見て、過程を見落としていた」と対にすると、二つの要素が短くつな
がる。

模範解答 完成した結果だけを見て、そこに至る変化や誰かの手による過程を見落としていた
こと。(40字)

別解例① 変化した結果には気づいても、少しずつ形づくられる過程へ心を向けていなかった
こと。(40字)

別解例② 目の前の結果だけで変化を捉え、そこに至る過程や積み重ねを意識していなかった
こと。(40字)

☆自己採点の観点

□ 「結果」と「過程」の二語を用いたか。

□ 完成後には気づいたことと、途中を見落としたことの両方を書いたか。

□ 二つの内容を対にし、45字以内の一文にしたか。

答案で注意したい点 「花壇に気づかなかったこと」だけでは、完成した結果には気づいたという対比
が表れない。

問五 要約(70字以内)

設問の意図 花壇という具体的な体験から、筆者の見方が自分・他者へ広がる流れを、中心的な
考えに絞ってまとめる。

根拠 第三～第六段落で変化と過程の関係が述べられ、第七～第十段落でその見方が他者や世
界へ広げられる。

必要要素 ①花壇の過程を見落とした経験。②変化は小さな積み重ねで生まれるという気づき。

③自分や他者の内面にも心を向けようとする結論。

組み立て方 「経験から」と知り、ようと考えた」とつなぐと、きっかけ・気づき・結論が一
文に収まる。

模範解答 筆者は、花壇ができる過程を見落とした経験から、変化は小さな積み重ねで生まれ
ると知り、自分や他者の内面の変化にも心を向けようと考えた。(66字)

別解例① 公園の花壇ができるまで変化に気づかなかった筆者は、その背後には過程があると学び、自分や周囲の人の内面にも丁寧な目を向けようと思った。(66字)

別解例② 花壇の変化を見過ごしたことをきっかけに、筆者は結果の前に小さな過程が積み重なる気づき、人の内側で起こる変化にも心を向けたいと考えた。(67字)

☆自己採点の観点

- 花壇の具体例を残しすぎず、そこから得た気づきを中心にしたか。
- 変化の過程と、人の内面へ向けるまなざしの両方を含めたか。
- きっかけから結論へのつながりが分かる一文を、70字以内で作ったか。

答案で注意したい点 花壇・友人・クラスメイトを順に並べるだけでは要約になりにくい。具体例を通して何を考えたかを残す。

任意課題 本文を踏まえて考える

解答例 毎朝見ていた弟の制服が急に小さく見え、背が伸びていたと気づいた。毎日の小さな違いを比べていなかったためだ。(53字)

考え方 経験の特別さは採点しない。「どのような変化か」と「なぜすぐ気づかなかったか」がつながっていればよい。想像した例でもよい。

☆自己採点の観点

- 変化の内容を一つに絞ったか。
- すぐ気づかなかった理由を、変化とつながる形で書いたか。
- 本文の考えを出発点にしつつ、自分の言葉で70字以内にまとめたか。

第一章の学び 見えているものだけで判断せず、結果の背後にある過程へ心に向ける。読解でも、答えだけでなく、そこへ至る本文のつながりを確かめる。

第二章 「リサイクル」という言葉の内側

この章で身につける力 言葉が示す印象と、実際の過程とを分け、必要条件と十分条件の違いを読む。

① 駅前の回収箱に、飲み終えた容器を入れる。決められた印に合わせて分け、ふたや中身を確認してから手を離す。箱には「リサイクル」と書かれている。その文字を見ると、自分の役目は終わり、容器はこのあと新しい製品へ生まれ変わるような気がする。

② しかし、ここで実際に終わったのは、容器を家庭のごみとは別の流れへ移したことだけである。「回収」は物の行き先を変える入口ではあっても、その物が何に、どのように使われるかまでを保証する言葉ではない。ところが私たちは、回収箱へ入れた瞬間に、その後の過程まで完了したように感じやすい。「リサイクル」という表示が、思考の入口ではなく句点のように働くのである。

③ 回収された物は、そのまま同じ姿で利用されるわけではない。まず、材質や汚れ方の違いを見分け、異なる物が混ざっていれば取り除く必要がある。さらに、洗う、細かくする、熱を加えるなどの工程を経て、再び材料として使える状態かどうか確かめられる。材料になっても、それを必要とする使い道がなければ、循環はそこで止まる。

④ 同じように見える容器でも、複数の材質が重ねられていたり、食品や薬品が残っていたりすれば、処理のしやすさは変わる。また、いったん材料へ戻せても、元と同じ品質を保てるとは限らない。そのため、回収された物の一部は別の製品の材料になり、一部は異なる方法で利用され、さらに別の一部は処分されることになる。「分けたこと」と「再び材料になったこと」は、同じではない。

⑤ だからといって、分別や回収に意味がないわけではない。混ぜて捨てれば、材料として使える物まで選び出しにくくなる。汚れを落とし、決められた方法で分けることは、再利用の可能性を残すために必要である。ただし、それは必要な条件の一つであって、それだけで再利用が実現する十分な条件ではない。

⑥ 問題は、「リサイクル」という言葉が、目標と結果の両方を一つに包んでしまう点にある。回収する仕組みを目指すときにも、実際に材料が循環した結果を示すときにも、同じ言葉が使われる。すると、その表示があるだけで環境への負担が小さくなったように見え、そもそも使う量を減らすことや、繰り返し使える形を選ぶことが視野から外れやすい。

⑦ 反対に、「回収してもすべてが材料になるわけではない」と知って、分別は何をしても無駄だと決めるのも早い。それもまた、複数の段階を一つの結論に縮める見方だからである。必要なのは、成功か失敗かを一語で決めることではない。どのような物を集め、どこで分け、何に使い、どこで循環が難しくなるのかを、段階ごとに確かめることだ。

⑧ 言葉は、複雑な仕組みを短く伝えるために欠かせない。しかし短い言葉は、複雑さを見えにくくすることもある。「回収」「再利用」「循環」という言葉を同じものとして扱わず、それぞれが過程のどこを指すのかを考えると、見えてくる課題も変わる。

⑨ 「リサイクル」と書かれた箱は、考える必要がなくなったことを知らせる箱ではない。むしろ、その先にどのような過程が続くのかを想像するための入口である。表示された言葉を安心の印として受け取るだけでなく、言葉がまとめている中身を確認すること。それが、仕組みに参加する私たちにできる最初の一步なのだ。

設問

問一 語句・表現

次の(一) (二)について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第二段落「『リサイクル』という表示が、思考の入口ではなく句点のように働く」の意味

ア 表示を見ることが、回収後の工程を詳しく調べようという関心が生まれる。

イ 表示が短すぎるため、回収箱の使い方を正しく理解できなくなる。

ウ 表示された言葉が、回収の仕組みを批判する根拠として用いられる。

エ 表示を見ただけで処理が完了したように感じ、その先を考えなくなる。

(二) 第五段落「必要な条件の一つであって、それだけで再利用が実現する十分な条件ではない」の意味

ア 分別は再利用の可能性を残すために必要だが、分別だけで再利用が決まるわけではない。

イ 分別は再利用と無関係なので、回収後の工程だけを改善すればよい。

ウ 正しく分別された物は、すべて同じ品質の材料として再利用できる。

エ 再利用を実現するには、家庭での分別だけが最も重要な条件になる。

解答 (1) 「 」 (2) 「 」

問二 本文の主張

本文の主張として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 回収後に処分される物がある以上、分別に参加することにはほとんど意味がない。

イ 表示を簡潔にすれば、回収から再利用までの複雑な工程を正確に伝えられる。

ウ 回収や分別の意義を認めつつ、言葉で一括せず、その後の過程を段階ごとに見る必要がある。

エ 環境への負担を減らすには、すべての容器を同じ材質で作ることが唯一の方法である。

解答 「 」

問三 短い記述（40字以内）

本文では、「回収」と「再利用」はどのような関係にあると述べられているか。二語を用い、40字以内で説明せよ。

手がかり 第二〜第五段落から、回収が何の入口であり、何までは保証しないかをまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問四 要旨（55字以内）

筆者は、環境に関わる言葉を受け取るとき、どのような姿勢が必要だと考えているか。本文全体に即して55字以内で説明せよ。

手がかり 「一語で成功・失敗を決めないこと」と「言葉が指す過程を確かめること」をつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

任意課題 身近な表示を考える（70字以内）

身近な表示や呼び名を一つ挙げ、その言葉だけでは分かりにくい実態を20字以内で書け。実際の経験でなく、想像した例でもよい。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落 回収箱の表示によって、回収後の過程まで完了したように感じる問題を示す。
第三・第四段落 回収後には選別や加工があり、回収と再利用は同じではないと説明する。
第五・第七段落 分別の必要性を認めつつ、一語で成功・失敗を決める見方を退ける。
第八・第九段落 言葉がまとめている過程を確かめる姿勢の大切さを述べる。

問一 語句・表現

(1) 正答 エ

根拠 第二段落では、回収箱へ入れた瞬間に「その後の過程まで完了したように感じやすい」とある。

解説 「句点」は文の終わりを示す。ここでは、表示が考えることを終わらせる働きを持つ、という比喩である。

誤答のずれ アは「入口ではなく」と反対である。イは表示の短さや使い方、ウは仕組みへの批判を論点にしており、比喩の意味からずれる。

(2) 正答 ア

根拠 第五段落は、分別によって再利用の可能性が残る一方、その後にも選別・加工・使い道などの条件があると述べる。

解説 必要条件は欠かせない条件、十分条件はそれだけで結果を成立させる条件である。本文では、分別は前者だが後者ではない。

誤答のずれ イは分別の必要性を否定している。ウ・エは、分別だけで再利用が決まるとする点で本文より強すぎる。

☆自己採点の観点

- 比喩や抽象語を、前後の具体的な説明へ戻して考えたか。
- 「必要である」と「それだけで実現する」を区別して選んだか。

問二 本文の主張

正答
ウ

根拠 第五〜第九段落では、分別を無意味とはせず、「どのような物を集め、どこで分け、何に使うか」を確かめるよう求めている。

解説 本文は、リサイクルを全面的に肯定も否定もせず、言葉の内側にある複数の段階を見ようとする立場である。

誤答のずれ アは第七段落が退ける見方である。イは短い言葉が複雑さを隠す面を落とす。エは本文にない唯一の解決策を加えている。

☆自己採点の観点

- 肯定か否定かの二択にせず、筆者が両方の単純化を退けていることを捉えたか。
- 一部の具体例ではなく、終盤まで一貫する主張と照らしたか。

問三 短い記述（40字以内）

設問の意図 二つの語を同じものとして扱わず、過程の前後関係と保証の範囲を説明する。

根拠 第二段落の「回収は物の行き先を変える入口」と、第四・第五段落の「分けたことと再び材料になったことは同じではない」。

必要要素 ①回収は再利用へ進む入口である。②回収だけでは再利用の実現は決まらない。

組み立て方 「回収は〜だが、〜までは保証しない」と逆接でつなぐ。

模範解答

回収は再利用へ進む入口だが、それだけで再利用の実現を保証するものではない。

(37字)

別解例①

回収は再利用の可能性を残すが、回収された物が再利用されるとは限らない。(35字)

別解例②

再利用には回収が必要だが、回収ただけで再利用が実現するわけではない。(35字)

☆自己採点の観点

- 「回収」と「再利用」の二語を用いたか。
- 回収の意義と、回収だけでは足りないことの両方を書いたか。
- 二つの関係を一文にし、40字以内に収めたか。

答案で注意したい点 「回収と再利用は違う」だけでは、どのように違うのかが分からない。入口と結果の関係まで示す。

問四 要旨（55字以内）

設問の意図 個別の処理方法ではなく、言葉と実態を照合するという本文全体の読み方をまとめる。

根拠 第七段落の「段階ごとに確かめる」と、最終段落の「言葉がまとめている中身を確認める」。

必要要素 ①表示だけで成功・失敗を決めない。②言葉の内側にある過程を段階ごとに確かめる。

組み立て方 「」だけで決めず、を確かめる姿勢」とまとめる。

模範解答 表示の言葉だけで仕組みの成否を決めず、その言葉がまとめている過程を段階ごとに確かめる姿勢。（45字）

別解例① 短い言葉を安心や失敗の印にせず、その内側で何が行われ、どこに課題があるかを順に見る姿勢。（45字）

別解例② 言葉によって成功か無駄かを即断せず、回収後の工程や結果を分けて確かめていくとする姿勢。（44字）

☆自己採点の観点

- リサイクルの賛否だけでなく、言葉を受け取る方法を答えたか。
- 一語で決めないことと、過程を確かめることを含めたか。
- 本文全体の結論として55字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「正しい情報を得る姿勢」だけでは一般的すぎる。何を一括せず、何を段階的に見るのかを具体化する。

任意課題 身近な表示を考える

解答例 「時短」という表示の商品でも、準備や後片づけに時間がかかることがある。言葉が示す便利さだけでなく、全体の手間を見る必要がある。（63字）

考え方 表示を否定する必要はない。「言葉から受ける印象」と「中身を確認めると見えること」を対にする。

☆自己採点の観点

- 表示や呼び名を一つに絞ったか。
- 言葉から受ける印象と、見えにくい実態との違いを書いたか。
- 価値判断だけで終わらず、70字以内で理由を示したか。

第二章の学び 短い言葉は複雑な仕組みを扱いやすくするが、考えることまで終わらせる場合がある。言葉を結論にせず、その内側の過程へ戻る。

第三章 言葉の力とその限界

この章で身につける力 言葉の意味が文脈によって定まる仕組みを捉え、すれ違いの原因と確かめ方を説明する。

① 先生が「課題は早めに出してください」と伝えた。ある生徒はその日のうちに提出し、別の生徒は締切の二日前に出した。先生は前者を思い浮かべていたが、後者も自分は十分に「早め」に出したと思っている。どちらかが言葉を知らなかったわけではない。それでも、同じ言葉から思い描いた時間には違いがあった。

② 言葉は、意味を詰めた小包のように、話し手から聞き手へそのまま移されるものではない。辞書は語の意味の範囲を示してくれるが、その場でどの意味が選ばれ、どの程度の強さで受け取られるかは、前後の文や状況によって変わる。「あとで」「大丈夫」「それをお願い」といった短い表現ほど、話し手と聞き手が何を共有しているかに支えられている。

③ これは、言葉の欠点とは限らない。教室で目の前の窓を指しながら「少し開けて」と言えば、窓の名前や位置を一から説明しなくても通じる。毎回すべてを言葉にしなくてよいからこそ、会話は素早く進む。省かれた部分を、互いに知っている状況が補っているのである。

④ ところが、共有していると思った状況が、実は同じでないことがある。話し手には、言葉にする前から目的や期限が見えている。そのため、自分が見ているのと同じ地図を、聞き手も見ているように感じやすい。一方、聞き手は、自分の経験や予定を手がかりに、省かれた部分を補う。二人とも筋の通った受け取り方をしている、補った中身が違えば、すれ違いは起こる。

⑤ 文字だけのやり取りでは、表情や声の調子、その場にある物など、意味を補う手がかりが少なくなる場合がある。短い返事の「いいよ」が、快い承諾なのか、しぶしぶ受け入れた返事なのかは、文字だけでは決めにくい。ただし、対面なら必ず正しく伝わるわけでもない。表情を読み違えたり、親しいから分かるはずだと思ひ込んだりすることもある。

⑥ このように考えると、すれ違いは、いつも話し手の説明不足や聞き手の不注意だけから生じるのではない。言葉が文脈に支えられる仕組みそのものに、ずれの可能性が含まれている。そう理解すれば、誤解が起きたときに、すぐ相手の悪意や能力のせいにならず、どの前提が共有されていなかったのかを探しやすくなる。

⑦ もっとも、「受け取り方は人それぞれだ」と言えば、どの解釈も同じように正しいことにはならない。言葉の前後、話された場面、会話の目的は、意味の範囲をある程度しぼっている。大切なのは、意味を完全に自由にするのではなく、自分の受け取り方だけが唯一だと決めないことである。

⑧ すれ違いを減らす方法は、難しいものばかりではない。「早めに」を「水曜日の午後五時までに」と言い換える。作業の見本を一つ示す。聞き手に「どのように理解したか」を話してもらう。分からない側も、「早めとはいつごろですか」と尋ねる。こうした確かめは、相手を疑うためではなく、二人が同じ地図を作るために行う。

⑨ 確認する責任を、いつも一方だけに負わせることもできない。話し手は、自分に見えるしている事情が相手にも見えているとは限らないと知る必要がある。聞き手も、分からない部分を想像だけで埋めず、必要なら問い返す。伝えることと受け取ることは、別々の作業ではなく、往復しながら一つの文脈を整える作業なのである。

⑩ 言葉が文脈によって変わるからこそ、言葉には比喩や冗談、新しい表現を生む力もある。意味が初めから一つに固定されていれば、私たちは未知の感覚を言い表すことも、相手に合わせて言い換えることも難しいだろう。言葉の限界と力は、別々の場所にあるのではない。同じ柔軟さが、豊かな表現も、すれ違いも生み出している。

⑪ 「伝えた」という事実だけでは、伝達は終わらない。どのように受け取られたかを確認かめ、必要なら言い直し、相手の言葉によって自分の理解も直していく。言葉の限界を知ることが、言葉をあきらめることではない。むしろ、言葉を一人で完成させず、相手との間で育てていくための出発点なのだ。

設問

問一 語句・表現

次の(一) (二) について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第二段落「言葉は、意味を詰めた小包のように、話し手から聞き手へそのまま移されるものではない」の意味

ア 言葉の意味は聞き手が自由に決めるので、話し手の意図は関係しない。

イ 言葉の意味は固定された形で届くのではなく、文脈を手がかりに受け手が組み立てる。

ウ 言葉は形がないため、物について正確に説明することができない。

エ 話し手は、伝えたい内容を必ず長い文章にして渡さなければならない。

(二) 第四・第八段落で用いられる「同じ地図」の意味

ア 話し手と聞き手が、同じ場所について同じ物を見ていること

イ 会話で使う語について、同じ辞書の説明を覚えていること

ウ 話し手が示した指示に、聞き手が疑問を持たず従うこと

エ 会話の目的や期限など、言葉を理解するための前提を共有していること

解答 (1) 「 」 (2) 「 」

問二 内容理解

本文によれば、悪意や不注意がなくてもすれ違いが起こる理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 話し手と聞き手が、それぞれの経験から省かれた前提を補い、その中身が異なる場合があるから。

イ 短い表現には辞書的な意味がなく、受け手がどのように解釈しても誤りにならないから。

ウ 人は相手の説明を聞くと、必ず自分に都合のよい意味へ変えてしまうから。

エ 対面の会話では、表情や声の調子が言葉の意味をかえって分かりにくくするから。

解答 「 」

問三 文章の展開

本文の展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

- ア 曖昧な言葉の禁止 | 文字による会話の否定 | 辞書を使う方法の提案
- イ 教師の説明不足 | 生徒の誤解 | 学校で期限を統一する必要性
- ウ 受け取りのずれの例 | 文脈が意味を支える仕組み | 確認による調整 | 言葉の力の捉え直し

- エ 言葉の歴史 | 対面会話の特徴 | 新しい表現が生まれる過程 | 結論

解答 「 」

問四 短い記述(45字以内)

筆者によれば、二人とも筋の通った受け取り方をしているも、なぜすれ違いが起こりうるのか。45字以内で説明せよ。

手がかり 第四段落から、何を手がかりに、何を補うのかを考える。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要約(65字以内)

言葉の「限界」と「力」の関係が分かるように、本文全体を65字以内で要約せよ。

手がかり 文脈への依存が、すれ違いと豊かな表現の両方にどう関わるかをまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

任意課題 曖昧な指示を言い換える（80字以内）

「できたら早めに見せて」という言葉を、相手が行動しやすい形に言い換えよ。必要なら、認の問いも加えて80字以内で書け。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落 同じ言葉でも受け取りが違う例から、意味が文脈に支えられる仕組みを示す。
第四～第六段落 共有している前提の違いによって、悪意がなくてもすれ違うと説明する。
第七～第九段落 解釈には範囲があることを確認し、言い換えや問い返しの役割を述べる。
第十・第十一段落 柔軟さが言葉の力と限界の両方を生み、伝達は共同の作業だと結ぶ。

問一 語句・表現

(1) 正答 イ

根拠 第二段落では、辞書が示す意味の範囲から、その場の文脈によって意味や強さが選ばれ
ると説明している。

解説 小包は中身がそのまま移る物である。本文はその比喻を否定し、意味が受け取りの場で
組み立てられることを示す。

誤答のずれ アは意味を完全に自由にしており、第七段落と合わない。ウは言葉の正確さを全面
否定し、エは省略が会話を支える点を落としている。

(2) 正答 エ

根拠 第四段落は、目的や期限の見え方が違うためにずれが起こるとし、第八段落は具体化や
確認で同じ地図を作ると述べる。

解説 地図は、会話の背景にある前提を表す比喻である。場所そのものではなく、何を目指
し、どう理解するかの見取り図を指す。

誤答のずれ アは比喻を物理的な場所に狭める。イは辞書の意味だけに限り、ウは一方的な服従
に置き換えている。

☆自己採点の観点

- 比喻が、本文中のどの抽象的な関係を表しているかを確かめたか。
- 直後だけでなく、同じ比喻が再び使われる段落も照らしたか。

問二 内容理解

正答
ア

根拠 第四段落では、話し手と聞き手がそれぞれ見えていない部分を補い、その内容が違えばずれが起これると述べる。

解説 二人の解釈がそれぞれ筋の通ったものでも、前提が異なれば同じ結論にはならない、という点が中心である。

誤答のずれ イは第七段落の「意味の範囲」を無視する。ウは「必ず」「都合よく」と強めすぎる。エは対面でも誤解がありうる理由を逆に行っている。

☆自己採点の観点

□ 誰か一人の失敗ではなく、文脈を補う仕組みそのものを答えとして選んだか。

□ 本文の可能性の表現を、「必ず起これる」という断定に変えていないか。

問三 文章の展開

正答
ウ

根拠 冒頭の「早めに」の例から仕組みを説明し、中盤で確かめ方、終盤で柔軟さが生む力へ論を進めている。

解説 本文は、ずれを欠点として終わらせず、同じ柔軟さが表現の力にもなると捉え直す構成である。

誤答のずれ アは言葉を禁止・否定する方向へ変える。イは学校の一例に範囲を狭める。エの言葉の歴史は本文にない。

☆自己採点の観点

□ 冒頭の例から結論まで、話題だけでなく考えの変化を追ったか。

□ 本文の一例を、文章全体の目的と取り違えていないか。

問四 短く記述（45字以内）

設問の意図 誤解を一方の不注意にせず、異なる前提から省略部分を補う関係として説明する。

根拠 第四段落の「聞き手は、自分の経験や予定を手がかりに、省かれた部分を補う」と「補った中身が違えば」。

必要要素 ①それぞれの経験や前提から省略部分を補う。②補った中身が異なる。
組み立て方 「それぞれゝため、ゝが異なるから」と因果でつなぐ。

模範解答 それぞれ異なる経験や前提から省かれた部分を補い、その中身が一致しないことがあるから。(42字)

別解例① 話し手と聞き手が別々の前提で言葉の省略部分を補い、異なる意味を組み立てる場合があるから。(11字)

別解例② 互いに共有していると思う前提が違い、省かれた情報を別の内容で補ってしまうことがあるから。(44字)

☆自己採点の観点

- 悪意や能力不足ではなく、前提の違いを理由にしたか。
- 省かれた部分を補うことと、その中身が異なることを含めたか。
- 原因と結果がつながる一文を5字以内で作ったか。

答案で注意したい点 「人によって考え方が違うから」だけでは広すぎる。何についての違いが、どのように意味のずれを生むかを書く。

問五 要約(65字以内)

設問の意図 限界と力を別々に並べるだけでなく、同じ柔軟さから生じる二面としてまとめる。
根拠 第六段落の「ずれの可能性」と、第十・第十一段落の「同じ柔軟さ」「相手との間で育てていく」。

必要要素 ①意味は文脈によって組み立てられる。②その柔軟さはすれ違いと表現の力を生む。
③確認し合う必要がある。

組み立て方 「ゝため、ゝも生むが、ゝすることで生かせる」とつなぐ。

模範解答 言葉は文脈の中で意味が組み立てられるため、豊かな表現もすれ違いも生む。その限界を知り、互いに確かめて育てることが大切だ。(60字)

別解例① 言葉の意味は前提や状況に支えられ、その柔軟さが表現の力と誤解の可能性を生むため、相手と確認しながら用いる必要がある。(58字)

別解例②

文脈によって意味が変わる言葉は、創造的な表現を可能にする一方ですれ違いも生む。だから伝え手と受け手が前提を整えることが重要だ。(61字)

☆自己採点の観点

- 言葉の限界を、単なる不正確さとしてまとめていないか。
- 柔軟さが力とすれ違いの両方を生むことを含めたか。
- 限界への向き合い方まで99字以内でつないだか。

答案で注意したい点 「言葉は便利だが誤解もある」だけでは、なぜ両方が生じるかが抜ける。文脈に支えられる仕組みを残す。

任意課題 曖昧な指示を言い換える

解答例 金曜日の午後五時までに一度見せてください。難しければ、いつなら見せられるかを木曜日までに知らせてください。(53字)

考え方 期限だけでなく、難しい場合の動き方も示すと、話し手と聞き手が同じ見通しを持ちやすい。

☆自己採点の観点

- 「早め」が具体的にいつかを示したか。
- 相手が難しい場合に、確認や相談ができる形にしたか。
- 命令を強くするだけでなく、共有する前提を増やしたか。

第三章の学び 言葉は文脈を省けるから力を持ち、同じ理由ですれ違いも生む。伝達を一方通行と考える、前提を確かめながら意味を整える。

第四章 生成AIと学びの過程

この章で身につける力 出来上がった答えと、そこへ至る学びの過程を区別し、道具の働きを条件つきで捉える。

① 作文の課題に取り組んでいた生徒が、生成AIに題名と条件を入力した。数秒後、画面には読みやすく整った文章が現れた。誤字も少なく、指定された字数にも収まっている。この文章を提出すれば、課題という形だけを見れば終わったことになる。では、この生徒は課題を通して学んだと言えるだろうか。

② ここで区別したいのは、「答えが出来上がったこと」と「学びが起こったこと」である。もちろん、完成した答えは学びの一つの証拠になりうる。しかし学びは、完成品だけに宿るわけではない。何を問われているかを捉え、知っていることを思い出し、材料を選び、うまくいかない箇所を直す。その途中で、自分の理解の穴や考え方の癖に気づくことにも学びがある。

③ 道具を使ったから学んでいない、と単純に決めることもできない。辞書で語を調べること、計算機で複雑な計算を確かめること、友人や教師から助言を受けることも、広い意味では自分の外にある力を借りる行為である。道具の利用そのものではなく、何を道具に任せ、何を自分で引き受けたかが問題になる。

④ たとえば、問いの意味も確かめず、生成された文章をそのまま写した場合、生徒の手元には完成品が残っても、なぜその内容になったのかは残りにくい。事実の誤りや論理の飛躍があっても気づけず、少し条件を変えられると答え直せないかもしれない。言葉が自分の理解と結びついていないからである。

⑤ 一方、まず自分で短い案を書き、生成AIに反対意見を出させ、自分の案と比べる使い方も考えられる。どの指摘を受け入れ、どれを退けるかを理由とともに選び、最後に自分の文章を直す。その過程では、AIの出力は完成答案の代わりではなく、自分の考えを外から見直すための材料になる。

⑥ 同じ道具が、考える時間を短くしてしまうこともあれば、考えを深めるきっかけになることもある。違いを生むのは、道具の名前よりも、学習者がどの場面で立ち止まり、選び、確かめ、修正したかである。「AIを使ったか、使わなかったか」という一問だけでは、学びの質は十分に分らない。

⑦ だから、利用をすべて禁止すれば問題が解決するとも限らない。禁止された場面では自力で書いても、利用できる場面で何を任せてよいかを判断する力は育たない。反対に、便利だから自由に使えばよいとするだけでは、答えを作ることと学ぶことが入れ替わる危険を見落とす。

⑧ 必要なのは、学びの過程が見える課題の設計である。最初の考えと書き直した考えを残す。なぜその資料を選んだかを説明する。出力の誤りや弱点を指摘する。条件を一つ変えた問いに答える。こうした活動があれば、完成した文章だけでは見えない理解や判断を確かめられる。

⑨ もっとも、過程を重視するとは、結果の質を問わなくてよいという意味ではない。誤った内容のままでも一生懸命考えたからよい、とは言えない。正確で読みやすい答えを目指しながら、その答えを自分で説明し、必要なら直せることが大切なのである。結果と過程は、どちらか一方を選ぶ関係ではない。

⑩ また、過程を見せることは、操作のすべてを細かく記録することでもない。学習上重要なのは、どこで迷い、何を比べ、どの理由で選択したかという判断の跡である。記録の量を増やすだけでは、かえって考える時間を奪う。何を確かめたい課題なのかに応じて、残す過程を選ぶ必要がある。

⑪ 生成AIは、「使えば学べる」「使えば学べない」のどちらかを自動的に決める道具ではない。それはむしろ、教育がこれまで何を学びとして評価してきたのかを映し出す。問うべきなのは、AIを使ったかどうかだけではなく、その人がどの思考を引き受け、どの判断を説明できるかである。完成した答えの背後にある過程を見ようとするとき、道具は学びを隠すものにも、学びを照らすものにもなりうる。

設問

問一 表現の理解

第六段落「『AIを使ったか、使わなかったか』という一問だけでは、学びの質は十分に分からない」の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア AIを使った事実は評価に関係しないため、利用方法を確認する必要もない。

イ AIを使わなければ深く学び、使えば考える力を失うと一律に判断できる。

ウ 同じ道具でも、任せた部分や比較・修正の仕方によって学びへの働きが変わる。

エ AIの出力は常に誤りを含むため、完成した答えの質だけを評価すべきである。

解答 〔 〕

問二 文章構成

第七段落が本文全体で果たす役割として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 生成AIを使う学習の利点を挙げ、利用を自由にする結論を導く。

イ 全面的な禁止と無条件の容認の両方に不足があると示し、別の判断軸へつなぐ。

ウ 教師がAI利用を見つける技術を説明し、課題の不正を防ぐ方法を示す。

エ 辞書や計算機と生成AIは同じ道具なので、区別する必要がないと述べる。

解答 〔 〕

問三 筆者の立場

本文における「結果」と「過程」の関係として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 学びでは過程だけが重要なので、完成した答えの正確さは評価しなくてよい。

イ 正しい答えが完成していれば、どのような過程で作られたかを問う必要はない。

ウ 結果と過程は別々に評価すべきで、両者が結びつくことはない。

エ よい結果を目指しつつ、答えを説明し修正できる過程も確かめる必要がある。

解答 「 」

問四 短い記述（55字以内）

完成した答えが正しく整っていても、それだけでは学びが起こったと判断できないのはなぜか。本文に即して55字以内で説明せよ。

手がかり 第二・第四段落から、完成品だけでは何が見えず、何ができない場合があるかをつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（75字以内）

生成AIが学びを支えるものになるためには、どのような使い方と評価が必要か。本文全体に即して75字以内で説明せよ。

手がかり 学習者が行うことと、教師が確かめることを一つずつ入れる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

任意課題 学びを見えるようにする（90字以内）

生成□を利用してよい作文課題を一つ想定し、生徒の学びの過程を確かめるために、何を一緒に提出させるとよいか。理由とともに90字以内で書け。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落 完成した答えと、考えを作り直す学びの過程とを区別する。
第三～第六段落 道具の利用自体ではなく、何を任せ、何を判断したかが重要だと示す。
第七～第十段落 禁止と無条件の容認を退け、結果と過程とともに確かめる課題を提案する。
第十一段落 △利用の有無より、学習者が引き受けた思考と説明可能な判断を問う。

問一 表現の理解

正答 ウ

根拠 第四・第五段落では、写す使い方と、反対意見を比べて修正する使い方が対比されている。

解説 利用の有無という一つの事実では、学習者がどの思考を引き受けたかまで分からない、という意味である。

誤答のずれ アは方法を確認しない方向へ進む。イは本文が退ける一律判断である。エはAIの誤りを必然とし、過程の評価を落としている。

☆自己採点の観点

- △への賛成・反対ではなく、同じ道具でも働きが変わる条件を読んだか。
- 「十分に分らない」を「まったく関係がない」と強めていないか。

問二 文章構成

正答 イ

根拠 第七段落は、禁止では判断力が育たず、自由利用だけでは学びとの入れ替わりを見落とすと、二つの立場を並べている。

解説 この段落を受け、第八段落から「過程が見える課題」という第三の判断の仕方が示される。

誤答のずれ アは容認だけを結論にする。ウの発見技術は本文にない。エは道具の違いを消すことが目的ではない。

☆自己採点の観点

- 段落の内容だけでなく、前後をつなぐ役割を考えたか。
- 二つの立場のうち、一方だけを筆者の結論にしていないか。

問三 筆者の立場

正答 エ

根拠 第九段落では「結果の質を問わなくてよい」わけではなく、正確な答えを目指しながら説明・修正できることが大切だとある。

解説 筆者は、結果と過程を二者択一にせず、完成品の質と、それを支える理解の両方を求めている。

誤答のずれ アとイは一方だけを評価する。ウは両者の関係を切り離し、本文の「どちらか一方を選ぶ関係ではない」と反対である。

☆自己採点の観点

- 「過程を重視する」を「結果を問わない」と読み替えていないか。
- 結果と過程を、互いを支える二つの観点として捉えたか。

問四 短い記述(55字以内)

設問の意図 成果物の見た目と、理解・判断・修正可能性との違いを因果で説明する。

根拠 第二段落の学びの過程と、第四段落の「なぜその内容になったのかは残りにくい」「答え直せないかもしれない」。

必要要素 ①完成品からは本人が考えた過程が見えない。②説明や修正ができる理解があるとは限らない。

組み立て方 「くだけではくが見えず、くとは限らないから」とまとめる。

模範解答

完成品だけでは何を考え判断したかが見えず、内容を自分で説明したり修正したりできるとは限らないから。(49字)

別解例① 正しい答えがあっても、そこへ至る思考の過程は分らず、本人の理解と結びついていとは限らないため。(49字)

別解例② 答えの形からは学習者が引き受けた判断が見えず、条件が変わったときに考え直せるか分からないから。(47字)

☆自己採点の観点

- 答えが正しい可能性を認めたうえで、不足する判断材料を書いたか。
- 思考の過程と、説明・修正できる理解のどちらかに触れたか。
- 「Aだから学べない」と道具だけを理由にせず、55字以内でまとめたか。

答案で注意したい点 「自分で作っていないから」だけでは、共同作業や助言を受けた学びまで否定してしまう。何を説明・修正できるかを書く。

問五 要旨(75字以内)

設問の意図 道具の使い方と課題・評価の設計を関係づけ、本文の条件付きの立場をまとめる。
根拠 第五段落の比較・選択・修正と、第八～第十段落の過程を見えるようにする評価。

必要要素 ①出力を比較・検討し、自分で選択・修正する。②判断の理由や変化を説明できる課題・評価にする。

組み立て方 「学習者がし、評価ではしを確かめる」と主体を分けてつなぐ。

模範解答 出力をそのまま答えにせず、比較して選び修正し、評価では完成品だけでなく判断の理由や考えの変化を説明できるか確かめる必要がある。(63字)

別解例① AIの案を検討材料として用い、採否を自分の理由で決めて書き直すとともに、その選択や理解の過程が見える課題にすることが必要である。(64字)

別解例② 答え作りを任せきらず、出力の弱点を確かめて自分の考えを直し、結果の正確さと説明・修正できる過程の両方を評価する必要がある。(61字)

☆自己採点の観点

- Aを使うか否かだけでなく、出力への関わり方を書いたか。
- 学習者の比較・選択・修正と、過程を確かめる評価を含めたか。
- 結果の質も不要ではないことを保ち、75字以内でまとめたか。

答案で注意したい点 「正しく使う」「主体的に使う」だけでは条件が見えない。出力に対して何をし、何を説明できる必要があるかを示す。

任意課題 学びを見えるようにする

解答例 最初に自分で書いた要点と、AIの案から採用しなかった部分、その理由を提出させる。完成文だけでなく、比較して選び直した判断を確かめられるからだ。(71字)

考え方 操作履歴をすべて集めるのではなく、学習目標に関わる判断の跡を一つか二つ選ぶ。

☆自己採点の観点

- 一緒に提出させる物を具体的に示したか。
- その物から、どのような学びや判断を確かめられるかを書いたか。
- 監視のためではなく、学びを見る課題として90字以内にまとめたか。

第四章の学び 道具の利用だけで学びの有無は決まらない。完成品の背後で、何を比較し、選び、説明し、修正できるかを見る。

第五章 時間の「多様性」

この章で身につける力 同じ時間を測る尺度と、一人ひとりが経験する時間とを対比し、両者の関係を読む。

① 電車を待つ十分間は長く感じるのに、好きな本を読んでいる十分間はすぐに過ぎる。同じ時計で測れば、どちらも同じ長さである。それでも、私たちが経験した時間の手触りはまるで違う。時間は誰にとっても同じ速さで進むと言われるが、その言葉は半分だけ正しい。

② 私たちは、少なくとも二つの時間の中で暮らしている。一つは、時計や暦によって測られ、他者と共有できる時間である。もう一つは、退屈、集中、不安、期待などによって伸び縮みして感じられる時間である。前者を「測る時間」、後者を「経験する時間」と呼んでみよう。

③ 測る時間は、社会生活に欠かせない。授業の開始、列車の発車、約束の時刻を共通の尺度で決めるから、互いに別の場所で暮らす人も行動を合わせられる。時計は人を縛るだけの道具ではない。先の予定を立て、自分の時間を他者と調整する自由も与えている。

④ しかし、測る時間だけが本当の時間だと考えると、経験の違いが見えにくくなる。一時間の自習時間が与えられても、落ち着いて机に向かえる人と、途中で何度も用事に応じなければならぬ人とは、同じ一時間に使える注意の量が違う。また、初めて取り組む作業と、慣れた作業とでも、必要な負担は同じではない。

⑤ だから、時計の上で同じ長さを与えることと、同じ機会を与えることは、必ずしも一致しない。これは、すべての締切や時間割をなくせという意味ではない。共通の時間がなければ、集団の活動は成り立ちにくい。大切なのは、共通の尺度が必要であることと、その尺度だけでは個々の状況を測りきれないことを、同時に認めることである。

⑥ 時間感覚の違いを、国や世代などの大きな集団の性質として決めつけるのも注意が必要だ。同じ人でも、朝と夜、慣れた場所と初めての場所、安心してるときと急いでいると

きでは、時間の感じ方が変わる。時間の多様性は、「ある集団はいつもゆっくりしている」という固定的な説明よりも、状況と注意の向け方の違いから考えるほうがよい。

⑦ 決まった時刻に集まらず、各自が都合のよいときに学んだり働いたりする形もある。こうした柔軟さは、生活に合わせて時間を選ぶ利点を持つ。一方で、区切りが見えにくくなり、いつ始め、いつ終わるかを一人で決める負担が増える場合もある。「いつでもよい」は、必ずしも「楽である」と同じではない。

⑧ このことから、時間の自由と時間の規則を単純に反対のものとは考えられない。規則があるから予定を共有でき、柔軟さがあるから異なる事情に対応できる。必要なのは、どちらか一方を正しいとすることではなく、その決まりは何のためにあり、誰にどのような負担を生んでいるかを確かめることだ。たとえば提出時刻を決める場合にも、遅れを一律に責めるだけでなく、学習の区切りを作るといった目的が果たしているかを見直せる。決まりは人を測って終わる判定ではなく、活動を支えるための道具なのである。目的に照らせば、守る部分と調整できる部分も分けて考えられる。

⑨ 遅れが生じたときにも、時刻だけを見てただちに人を評価しないほうがよい。約束を軽く見た結果なのか、予想できない事情があったのか、そもそも設定された時間に無理があったのかで、意味は変わる。もちろん、事情を尋ねればすべてが許されるわけではない。しかし、理由を区別せずに同じ評価を下すことも、公平とはいえない。

⑩ 時間の多様性を認めるとは、一人ひとりが好きな時間だけで生きることではない。測る時間によって他者と約束しながら、経験する時間の違いにも想像を向けることである。同じ時計を共有しつつ、その時計だけでは見えない負担や集中のあり方を考える。二つの時間を行き来するところに、時間とともに生きるための知恵がある。

設問

問一 表現の理解

第一段落「その言葉は半分だけ正しい」の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 時計で測る長さは等しいが、感じられる時間の長さや負担は人や状況によって異なる。

イ 時計は正確に時間を測る場合と、実際より長く測る場合とが同じくらいある。

ウ 待つ時間は長く、本を読む時間は短いので、時計の進み方そのものが変化する。

エ 時間の感じ方には違いがあるため、約束の時刻を共有することには意味がない。

解答 「 」

問二 内容理解

本文における「測る時間」と「経験する時間」の関係として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 測る時間は社会のための時間で、経験する時間は個人だけに必要なため、両者は交わらない。

イ 経験する時間の違いを優先すれば、共通の時刻や締切はすべて不要になる。

ウ 測る時間で行動を調整しながら、それだけでは捉えられない経験や負担の違いも考える必要がある。

エ 測る時間より経験する時間のほうが本当なので、評価は感じ方だけを基準にすべきである。

解答 「 」

問三 文章構成

第七段落で、柔軟な時間の利点と負担の両方を述べる理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 決まった時間に集まる学び方を廃止し、自由な学び方へ移すため。

イ 規則か自由かの一方だけを選ばず、どの時間の仕組みにも働きと負担があると示すため。

ウ 自分で時間を管理できない人には、柔軟な学び方が向かないと判断するため。

エ 新しい学び方では、従来より学習時間が長くなることを証明するため。

解答 「 」

問四 短い記述（55字以内）

筆者が「時計の上で同じ長さを与えること」と「同じ機会を与えること」は一致しない場合があると述べるのはなぜか。55字以内で説明せよ。

手がかり 第四段落の一時間の例から、使える注意や負担の違いをまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（75字以内）

時間の規則と柔軟さについて、筆者はどのような考えを示しているか。本文全体に即して75字以内で説明せよ。

手がかり 規則と柔軟さの働きを一つずつ示し、何を確かめるべきかを結ぶ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

任意課題 二つの時間から考える（90字以内）

学校や日常生活の時間の決まりを一つ挙げ、その目的を保ちながら事情の違いにも対応する工夫を、90字以内で提案せよ。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落 時計で測る時間と、心身で経験する時間を区別する。

第三～第五段落 共通の尺度の必要性和、それだけでは機会の違いを測れない限界を示す。

第六・第七段落 時間感覚を集団へ固定せず、柔軟な時間にも負担があると説明する。

第八～第十段落 規則と柔軟さを目的に応じて調整し、二つの時間をともに考える立場を示す。

問一 表現の理解

正答
ア

根拠 第一段落は、時計上の十分間は同じだが、「経験した時間の手触り」は異なると対比している。

解説 「半分」は、測る時間の平等さを認めながら、経験する時間の違いを加える表現である。

誤答のずれ イ・ウは時計の測定そのものが変わるとする。エは測る時間の必要性まで否定し、第三段落以降と合わない。

☆自己採点の観点

☐ 「半分」の一方だけでなく、正しい面と足りない面の両方を捉えたか。

☐ 時計の進み方と、時間の感じ方を混同していないか。

問二 内容理解

正答
ウ

根拠 第五・第十段落では、共通の尺度を必要としつつ、それだけでは個々の状況を測れないと述べる。

解説 二つの時間は優劣や二者択一の関係ではなく、社会でともに生きるために行き来すべき二つの観点である。

誤答のずれ アは両者を切り離す。イ・エは経験する時間だけを優先し、本文が認める共通尺度の役割を落としている。

☆自己採点の観点

- 二つの時間のどちらかを正しいものとして選んでいないか。
- 共通の尺度の利点と限界を同時に含む選択肢を選んだか。

問三 文章構成

正答 イ

根拠 第八段落は、時間の自由と規則を「単純に反対のものとは考えられない」とまとめている。

解説 第七段落の両面提示は、柔軟さを無条件に良いものとせず、目的と負担を確かめる議論へ進むためにある。

誤答のずれ アは自由だけを結論にする。ウは人を固定的に分類し、エは本文にない時間量の証明である。

☆自己採点の観点

- 具体例の良し悪しではなく、次の段落へつながる論理上の役割を考えたか。
- 本文が一貫して二者択一を避けていることを捉えたか。

問四 短い記述(55字以内)

設問の意図 形式上同じ時間と、実際に活動へ使える条件との差を説明する。

根拠 第四段落では、同じ一時間でも、途中の用事や作業への慣れによって使える注意や負担が異なるとある。

必要要素 ①同じ時間でも置かれた状況が違う。②使える注意や必要な負担が異なる。

組み立て方 「同じ長さでも、〴〵によって〴〵が異なるから」とつなぐ。

模範解答

同じ長さの時間でも、置かれた状況や作業への慣れによって、実際に使える注意や必要な負担が異なるから。(49字)

別解例①

時計では同じ一時間でも、途中の用事や経験の差により、課題へ向けられる集中や負担が同じとは限らないから。(51字)

別解例② 等しい時間があっても、生活上の事情や作業の慣れ方が違えば、その時間にできることや負担が変わるから。(49字)

☆自己採点の観点

- 時計上の長さが同じであることを否定していないか。
- 状況の違いと、使える注意・負担の違いをつないだか。
- 「人それぞれだから」で終わらず、55字以内で理由を具体化したか。

答案で注意したい点 「時間の感じ方が違うから」だけでは、機会の差の説明として足りない。活動へ使える条件に触れる。

問五 要旨(75字以内)

設問の意図 二つの立場を対立させず、目的と負担に応じた調整という結論をまとめる。

根拠 第八段落の「規則があるから予定を共有でき、柔軟さがあるから異なる事情に対応できる」と最終段落。

必要要素 ①規則は予定の共有を支える。②柔軟さは事情の違いに対応する。③目的と負担を確かめて両者を調整する。

組み立て方 「規則は、柔軟さは、を見て調整する」とつなぐ。

模範解答 規則は他者と予定を共有するために必要で、柔軟さは異なる事情に対応するために必要なので、決まりの目的と負担を確かめて両者を調整すべきだ。(67字)

別解例① 共通の時間は人々の行動を合わせ、柔軟な時間は個々の状況に応じる働きを持ったため、どちらかを絶対にせず目的に合わせて組み合わせる必要がある。(68字)

別解例② 時間の規則によって約束を成り立たせながら、時計だけでは見えない負担には柔軟に応じ、その決まりが誰に何を求めるかを問い直すべきである。(66字)

☆自己採点の観点

- 規則と柔軟さの両方に役割があると書いたか。
- 単なる中間案ではなく、目的や負担を確かめて調整する考えを含めたか。
- 二つの関係が分かる一文を75字以内で作ったか。

答案で注意したい点 「どちらも大切だ」だけでは、なぜ大切で、どう使い分けるかが分からない。それぞれ働きの示す。

任意課題 二つの時間から考える

解答例 課題の締切日は共通にしつつ、途中で短い相談日を設ける。提出時刻を共有して授業を進めながら、各自の事情やつまづきを早めに確かめて対応できる。(69字)

考え方 規則をなくすか守らせるかだけで考えず、規則の目的と、負担を調整する方法を分けて考える。

☆自己採点の観点

- 時間の決まりと、その目的を具体的に示したか。
- 目的を失わずに事情の違いへ対応する工夫を示したか。
- 誰かを一方的に責める案にせず、60字以内でまとめたか。

第五章の学び 時計は他者と行動を合わせる尺度であり、経験する時間はその尺度からこぼれる違いを教える。二つを対立させず、目的に応じて行き来する。

第六章 「許す」という行為について

この章で身につける力 似て見える行為を区別し、一つの価値を他者へ強制しないための論理を読む。

① 誰かに傷つけられた人へ、「そろそろ許したほうがよい」と声をかけることがある。その言葉は、苦しみから自由になってほしいという願いから出るのかもしれない。しかし、言われた側には、「まだ怒っている自分が悪い」と責められたように響くこともある。許しを勧める言葉が、別の負担になるのである。

② 「許す」という一語には、いくつもの異なる行為が重ねられている。相手の事情を理解すること。仕返しをしないと決めること。怒りとの距離を変えること。相手との関係を作り直すこと。起きた行為を問題ではなかったと認めること。日常では、これらが一つのまとまりのように語られやすい。

③ けれど、これらは同時に起こるとは限らない。相手がなぜその行為をしたか理解しても、その行為を正しいとは思えないことがある。仕返しを望まなくなっても、再び親しく付き合いたいとは限らない。謝罪を受け止めても、以前と同じ信頼がすぐ戻るわけではない。何を「許した」と呼ぶかによって、話の内容は大きく変わる。

④ まず区別したいのは、許すことと、被害を帳消しにすることである。許しを考えるためには、何が起こり、どのような傷が残ったかを認める必要がある。行為を正当化したり、苦痛を小さく見積もったりして「もう終わったこと」にするのは、許しというより、被害を見えなくすることに近い。

⑤ 次に、許すことと、関係を修復することも同じではない。関係を作り直すには、安全が保たれ、相手が責任を認め、同じことを繰り返さないための行動を取ることが必要になる場合がある。それらが整わないまま距離を縮めるよう求めれば、傷ついた人を再び危険にさらしかねない。距離を保つ選択と、心の中で過去との関わり方を変えることは、両立しうる。

⑥ さらに、許しを一度きりの決断として考えないほうがよい。怒りが弱まったと思ったあとで、ある出来事をきっかけに苦しさが戻ることもある。「今はまだ決められない」とい

う答えは、判断から逃げているのではない。自分の状態を確かめ、必要な時間を取るための一つの選択である。

⑦ 「許せば自分が楽になる」という言い方にも注意がいる。実際に、怒りを抱え続ける苦しさから離れたいと願う人はいるだろう。しかし、許せば必ず心が軽くなると約束することはできない。許さない人を、過去にとらわれた未熟な人と決めつけることもできない。回復の道筋は一つではないからである。

⑧ 怒りそのものにも働きがある。怒りは、越えてはならない境界が破られたことを知らせ、不当な扱いを拒む力になる。もちろん、怒りによって自分や他者を傷つける行為が正当化されるわけではない。それでも、怒りをただ消すべき感情とみなせば、その感情が守ろうとしているものまで見失う。

⑨ 周囲の人にできるのは、許すという感情上の結論を代わりに決めることではない。起きたことを軽く扱わず、安全や責任の条件を整え、本人が距離の取り方を選べるように支えることである。助言する側の安心のために、「もう許した」と言わせてはならない。

⑩ このように考えるなら、許しは、相手との関係を必ず元へ戻す義務ではない。自分と過去との関係を、いつ、どのように変えるかについて持ちうる選択肢の一つである。変えないこと、まだ決めないこと、別の形で区切りをつけることも含めて、選択は傷ついた本人に開かれていなければならない。

⑪ 許しを単純な善として掲げると、その善に届かない人を責めることになる。大切なのは、許す人と許さない人を比べることではない。被害を消さず、関係の安全を考え、それぞれが自分の時間で選べる余地を守ることだ。許しに価値があるとすれば、それは強制された正解ではなく、自由の中で選び取れる可能性だからである。

設問

問一 語句・表現

第四段落「被害を帳消しにする」の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 被害を受けた人が、相手への仕返しをしないと決めること

イ 起きた行為の責任を確かめ、同じことが起こらないようにすること

ウ 傷ついた人が、相手との距離を保ちながら生活すること

エ 起きた行為や苦痛を、問題ではなかったかのように扱うこと

解答 〔 〕

問二 内容理解

本文における「許すこと」と「関係を修復すること」の関係として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 許すことと関係修復は別であり、距離を保ちながら過去との関わり方を変える場合もある。

イ 許したなら以前と同じ関係へ戻る必要があり、距離を保つことは許していない証拠になる。

ウ 関係を修復するには、傷ついた側が怒りをすべて手放すことだけが条件になる。

エ 関係修復が難しい場合には、心の中で過去との関わり方を変えることもできない。

解答 〔 〕

問三 段落の役割

第八段落で怒りの働きを述べる役割として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 怒りに基づく行動はすべて正しいと認め、許しを否定するため。

イ 傷ついた人は怒りを保ち続けるべきだと、新しい義務を示すため。

ウ 怒りを消すことだけを回復と考えず、感情が境界を守る面もあると示すため。

エ 怒りを感じない人は被害を受けていないと判断するため。

解答 「 」

問四 短い記述（60字以内）

筆者が、許すことと被害の帳消しや関係修復とを区別するのはなぜか。本文に即して60字以内で説明せよ。

手がかり 第四・第五段落から、被害の認識と安全な距離の二点をまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（80字以内）

許しが「自由の中で選べる可能性」でなければならないのはなぜか。本文全体に即して80字以内で説明せよ。

手がかり 許しの強制が生む負担と、回復の道筋が一つでないことをつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

任意課題 第三者の言葉を考える（90字以内）

傷ついた人に「早く許したほうがよい」と言わずに寄り添うなら、どのような言葉をかけられるか。架空の場面として90字以内で書け。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落 「許す」に複数の行為が重ねられ、同時には起こらないことを示す。
第四～第六段落 被害の帳消し、関係修復、即時の決断と許しを区別する。
第七・第八段落 許しを回復の唯一の道とせず、怒りが境界を守る働きも認める。
第九～第十一段落 周囲は結論を強制せず、本人が自分の時間で選べる余地を支えるべきだと結ぶ。

問一 語句・表現

正答 エ

根拠 第四段落では、行為を正当化し、苦痛を小さく見積もって「もう終わったこと」にする、と言い換えている。

解説 「帳消し」は、ここでは被害の事実や重みを見えなくする扱いを指す。許しとは区別される。

誤答のずれ アは仕返しをしない選択、イは責任を認める働き、ウは安全のための距離であり、いずれも被害を消すことではない。

☆自己採点の観点

- ☐ 比喻を、同じ段落にある具体的な言い換えと照らしたか。
- ☐ 許しと区別されている行為を、許しの一例として選んでいないか。

問二 内容理解

正答 ア

根拠 第五段落は、関係修復には安全や責任が必要な場合があり、距離を保つことと心の変化は両立すると述べる。

解説 本文は、許しを関係の回復と同一視せず、外的な距離と内的な選択を分けて考えている。

誤答のずれ イは両者を同一にする。ウは責任や安全の条件を落とし、エは両立可能性を否定している。

☆自己採点の観点

- 心の中の変化と、相手との外的な関係を分けて読んだか。
- 「両立しうる」という可能性を、「必ずそうなる」という断定に変えていないか。

問三 段落の役割

正答
ウ

根拠 第八段落では、怒りが境界の侵害を知らせる一方、怒りによる加害は正当化されないと両面を述べる。

解説 怒りを美化するのではなく、消すべき感情とだけ見なす単純化を避ける役割である。

誤答のずれ ア・イは怒りを絶対化し、本文の留保を落とす。エは怒りの有無から被害を判断する本文にない基準である。

☆自己採点の観点

- 怒りの働きを認めることと、怒りに基づく行動を正当化することを区別したか。
- 段落が、許しを唯一の回復とする見方をどう修正するか考えたか。

問四 短い記述（60字以内）

設問の意図 似て見える行為を分けることで、被害の否定や危険な関係回復を防ぐ論理を説明する。

根拠 第四段落の「被害を見えなくする」と、第五段落の「距離を縮めるよう求めれば、再び危険にさらしかねない」。

必要要素 ①許しは被害をなかったことにする行為ではない。②関係修復には安全や責任が別に必要である。

組み立て方 「～ではなく、～には別の条件が必要だから」とつなぐ。

模範解答

許しは被害をなかったことにする行為ではなく、関係の修復には安全や責任ある行動という別の条件が必要だから。(52字)

別解例① 被害を認めることと許しは両立し、相手との関係を戻すには安全や責任が必要なので、三つを同じにできないから。(52字)

別解例② 許しても被害の事実は消えず、関係を作り直すには安全や相手の責任や再発を防ぐ行動が別に求められるため。(50字)

☆自己採点の観点

- 許しが被害の否定ではないことを書いたか。
- 関係修復には、安全や責任など別の条件があると示したか。
- 三つの違いが分かる一文を60字以内で作ったか。

答案で注意したい点 「それぞれ意味が違うから」だけでは説明にならない。混同すると、何が見えなくなり、どんな危険があるかを示す。

問五 要旨(80字以内)

設問の意図 本人の選択を守る結論を、言葉の圧力・時間・複数の回復経路からまとめる。

根拠 第一・第六・第七段落の強制と時間の問題、最終二段落の「選択は傷ついた本人に開かれて」。

必要要素 ①許しを強いると被害者を再び責める。②回復の時期や道筋は一つではない。③本人が距離や時期を選ぶ必要がある。

組み立て方 「～ため、～ではなく、本人が～できなければならない」とまとめる。

模範解答 許しを正解として強いると、まだ怒りや苦しみを持つ人を責めることになり、回復の時期や道筋も人によって違うため、本人が距離や時期を選ぶ必要がある。(72字)

別解例① 被害を受けた人に許しを求めれば新たな負担となり、許さないことやまだ決めないことも回復の選択になりうるので、結論は本人の時間に委ねる必要がある。(71字)

別解例② 許せば必ず回復するとは限らず、強制は苦しむ人を未熟だと扱いかねないため、被害を消さずに本人が過去との関わり方を自分で選べるのが大切だから。(70字)

☆自己採点の観点

- 許しを強制することが、傷ついた人への負担になると書いたか。
- 許さない・まだ決めないなど、回復の道筋が複数あることを含めたか。

□ 本人の時間と選択へ結論をつなぎ、80字以内にまとめたか。

答案で注意したい点 「人それぞれだから」だけでは、なぜ自由が必要かが弱い。強制が生む負担と、回復の複数性を示す。

任意課題 第三者の言葉を考える

解答例 今すぐ許すかどうかを決めなくてよいと思う。何が伝わったかを軽く扱わず、これからのくらい距離を取りたいかを、あなたのペースで一緒に考えたい。(71字)

考え方 感情の結論を代わりに決めず、被害を認め、本人が時期や距離を選べる言葉にする。

☆自己採点の観点

- 許す・許さないの結論を相手へ求めているか。
- 起きたことや苦しさを軽く扱わない言葉になっているか。
- 本人の時間や距離の選択を支える内容を80字以内で書いたか。

第六章の学び 一語に重ねられた複数の行為を分けると、強制の危うさが見える。倫理的な言葉ほど、誰がいつ選ぶのかを確かめる。

第七章 「科学的である」とはどういうことか

この章で身につける力 結論の権威ではなく、条件をそろえ、反例に開かれ、説明を修正する過程として科学を読む。

① 広告やニュースで「科学的に確かめられた」という言葉を見ると、その結論にはもう疑う余地がないように感じることもある。「科学的」という表示が、正しさを保証する印のように用いられるからである。しかし、科学が信頼される理由は、決して間違えないからではない。間違いを見つけ、説明を直すための手順を持つからである。

② 科学的に考えるとは、まず確かめたい問いをはっきりさせることだ。次に、考えられる説明を仮に置き、どのような結果が出ればその説明を支え、どのような結果なら見直す必要があるかを決める。そして、他の人も手順をたどれる形で観察や実験を行い、記録を残す。

③ たとえば、二つの鉢に同じ種類の植物を植えたとする。一方は窓辺に置いて毎日水をやり、もう一方は暗い場所に置いて二日に一度水をやった。窓辺の植物のほうがよく育ったとしても、この結果だけで「光が多いほど育つ」と結論づけることはできない。光だけでなく、水の量も違っているからである。

④ 光の影響を確かめたいなら、水の量、土、鉢の大きさなどをできるだけそろえ、主に光の条件だけを変える必要がある。こうして、結果に影響しそうな別の理由を減らしていく。条件をそろえることは、現実を単純にするためではなく、どの違いが結果と関係したのかを考えやすくするために行う。

⑤ 一度の結果だけで決めないことも重要である。植物の個体差や測り方、その日の環境によって、偶然の違いが生じるかもしれない。回数を重ね、記録を比べ、別の人が似た条件で確かめることで、その説明をどの程度信頼できるかが見えてくる。記録を公開するのは、権威を示すためではなく、他者が確かめ直せるようにするためである。

⑥ 予想と違う結果が出たとき、それは実験がすべて失敗したことを意味しない。条件のそろえ方が不十分だったのか、仮に置いた説明が狭すぎたのか、新しい要因があるのかを考

える材料になる。科学的な説明は、反対の結果が出ても決して変わらない主張ではない。どのような結果なら誤りだと分かるかが示されているからこそ、確かめることができる。

⑦ もちろん、現実の条件を完全に同じにすることは難しい。観察できる範囲にも、測る道具にも限界がある。そのため科学では、分かったことだけでなく、どの条件で調べたか、何はまだ分からないかも重要になる。「今の証拠からはこの説明が最もよい」と述べることで、「これが絶対に変わらない真理だ」と述べることは違う。

⑧ では、結論が修正されうるなら、科学は頼りにならないのだろうか。そうではない。何でも同じように正しいとするのではなく、どの説明がより多くの証拠に支えられ、どこまで確かめられているかを比べることができる。確実さに段階があることを示すのは、弱さではなく、知っている範囲を誠実に表す方法である。

⑨ 専門家の知識や経験は、複雑な問題を考えるうえで大切である。しかし、「専門家が言ったから」という理由だけで科学的になるわけではない。どのような資料と方法に基づき、反対の証拠が出たときに説明を直せるかが問われる。人ではなく手順だけを見ればよいのではないが、肩書が手順の確認に代わることはできない。

⑩ 日常で目にするすべての主張を、自分で実験して確かめることはできない。それでも、「何と比べたのか」「ほかの理由は考えられないか」「どの範囲まで言えるのか」と問うことはできる。こうした問いは、専門家を疑って退けるためではなく、示された説明を正しい大きさに受け取るためにある。

⑪ 「科学的」という言葉は、議論を終わらせる印ではない。それは、問い、条件、記録、反対の結果、修正へ開かれているという約束である。今分かっていることを大切にしながら、分からないことを隠さず、よりよい説明が現れれば考えを変える。その過程を続ける姿勢にこそ、科学的であることの強さがある。

設問

問一 語句の理解

第六段落「どのような結果なら誤りだと分かるかが示されている」の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 科学的な説明は、反対する人がいれば直ちに誤りになる。

イ 説明が正しくない可能性を確かめる条件があり、結果によって見直せる。

ウ 一度支持された説明は、反対の結果が出ても同じ形で守られる。

エ 実験で誤りを見つけるには、予想と同じ結果を繰り返せばよい。

解答 「 ー 」

問二 具体例の理解

第三段落の植物の実験から、「光が多いほど育つ」とは結論づけられない理由として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 二つの植物は同じ種類なので、育ち方に違いが出るはずがないから。

イ 植物の成長は科学的に測ることができず、見た目では比べられないから。

ウ 窓辺の植物がよく育ったという結果が、予想と同じで信頼できないから。

エ 光の条件と同時に水の量も違い、どちらが成長に関係したか分けられないから。

解答 「 ー 」

問三 本文の主張

本文の主張として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 科学的であるとは、条件と限界を示して検証に開き、証拠に応じて説明を修正し続ける姿勢である。

イ 科学的な結論は専門家の肩書によって保証されるため、一般の人は方法を問う必要がない。

ウ 科学には不確かさがあるので、異なる説明はすべて同じ程度に正しいと認めるべきである。

エ 科学的な実験では条件を完全に同じにできるため、一度の結果でも確実な結論を得られる。

解答 「 」

問四 短い記述（60字以内）

筆者は、予想と違う結果が出ることに科学上の意味があると考えている。それはなぜか。60字以内で説明せよ。

手がかり 第六段落から、何を見直す材料になるかをまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（80字以内）

筆者が考える「科学的である」姿勢とはどのようなものか。本文全体に即して80字以内で説明せよ。

手がかり 問いから検証までの手順と、分からないこと・反対の結果への態度をつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落 科学を正しさの印ではなく、問いと検証の手順として捉える。

第三～第五段落 植物の例から、条件をそろえ、繰り返し、他者が確かめられる記録の役割を示す。

第六～第八段落 反対の結果と限界を認め、確実さの段階を示すことが科学の強さだと説明する。

第九～第十一段落 肩書だけに頼らず、主張の範囲と方法を問い、説明を修正し続ける姿勢を述べる。

問一 語句の理解

正答
イ

根拠 第六段落は、反対の結果が説明や条件を見直す材料になり、変わらない主張では確かめられないと述べる。

解説 科学的な説明は、どの結果にも合う形ではなく、合わない結果が出れば修正されうる形で示される。

誤答のずれ アは人の反対と証拠を混同する。ウは本文と逆である。エは予想と同じ結果だけを求め、誤りを確かめられない。

☆自己採点の観点

□ 「反対意見」と「反対の結果」を区別したか。

□ 誤りうることを、信頼できないことではなく、確かめ直せる条件として読んだか。

問二 具体例の理解

正答
エ

根拠 第三段落の末尾に「光だけでなく、水の量も違っているから」と明示されている。

解説 確かめたい条件以外も変わっているため、結果の原因を光だけに結びつけられない。

誤答のずれ アは個体差を無視する。イは測定不能とする本文にない主張である。ウは予想と一致したこと自体を問題にしている。

☆自己採点の観点

- 結果が出たことと、その原因を一つに定められることを区別したか。
- 本文中で同時に変わっている条件を具体的に確かめたか。

問三 本文の主張

正答 ア

根拠 最終段落は、問い・条件・記録・反対の結果・修正へ開かれた過程を科学的な姿勢としてまとめる。

解説 本文は、絶対に間違えないことではなく、確かめ直しと修正ができることに科学の強さを見ている。

誤答のずれ イは肩書を手順の代わりにする。ウは証拠による比較を落とす。エは現実の条件の限界と繰り返しの必要性に反する。

☆自己採点の観点

- 科学を結論の性質ではなく、問いから修正までの過程として捉えたか。
- 不確かさを「何でもよい」という相対化へ変えていないか。

問四 短い記述（60字以内）

設問の意図 反対の結果を失敗とせず、条件や説明の修正を促す証拠として説明する。

根拠 第六段落の「条件のそろえ方」「仮に置いた説明」「新しい要因」を考える材料になるという部分。

必要要素 ①条件や仮説の不足を示す。②説明を見直し、新しい要因を考える材料になる。

組み立て方 「」を示し、」する材料になるから」と因果でつなぐ。

模範解答 予想と違う結果は、条件のそろえ方や説明の不足を示し、説明を見直したり要因を考えたりする材料になるから。（51字）

別解例①

反対の結果によって、実験条件や仮説のどこに問題があるかを探り、よりよい説明へ修正することができるから。（51字）

別解例② 想定外の結果は失敗ではなく、条件の見落としや説明の狭さを明らかにし、仮説を改める手がかりになるため。(50字)

☆自己採点の観点

- 予想と違う結果を、単なる失敗として扱っていないか。
- 条件や説明の見直しと、よりよい仮説への修正を含めたか。
- 「新しい発見があるから」だけで終わらず、60字以内で過程を示したか。

答案で注意したい点 「勉強になるから」では科学上の意味が見えない。何の不足を知り、何を直せるかを書く。

問五 要旨(80字以内)

設問の意図 方法の具体性と、限界を認めて修正する態度の両方を統合する。

根拠 第二〜第六段落の検証手順と、第七〜第十一段落の限界・確実さ・修正への開かれ方。

必要要素 ①条件・記録を示し、他者が検証できる。②限界や反対の結果を認め、証拠に応じて説明を修正する。

組み立て方 「〜できる形で確かめ、〜に応じて〜する姿勢」とまとめる。

模範解答 問いと条件、記録を確かめられる形で示し、分かった範囲と限界を区別しながら、

反対の結果や新しい証拠に応じて説明を修正する姿勢。(62字)

別解例① 結論を権威として示すのではなく、方法と条件を公開して検証に開き、何が未確定かを認め、証拠が変わればよりよい説明へ改めていく姿勢。(63字)

別解例② 仮説を条件をそろえて繰り返し確かめ、他者が検討できる記録を残すとともに、誤りうることを認めて結果に合わせて考え直す姿勢。(60字)

☆自己採点の観点

- 結論が正しいことだけでなく、確かめ方を示したか。
- 限界や反対の結果を認め、説明を修正する態度を含めたか。
- 専門家への賛否に狭めず、80字以内で方法と姿勢を統合したか。

答案で注意したい点 「疑う姿勢」だけでは、何でも否定する態度に見える。条件・記録・検証と、証拠に応じた修正を含める。

第七章の学び 科学的な強さは、決して誤らないことではなく、条件と限界を示し、他者の検証と反対の証拠によって説明を直せることにある。

第八章 公共空間のゆくえ

この章で身につける力 一つの規則が異なる利用者に与える働きを比べ、公共性を対話と見直しの過程として捉える。

① 雨の午後、駅前の広場では、屋根のあるベンチにさまざまな人が座っている。待ち合わせをする人、買い物の途中で休む人、行き先を決めかねて長く座る人。互いに名前も目的も知らないが、同じ場所を一時的に分け合っている。こうした場所を、私たちは公共空間と呼ぶ。

② 公共空間とは、単に国や自治体が所有する場所というだけではない。また、入口が開いていて、誰でも物理的に入れる場所だけを指すのでもない。知らない人どうしが、異なる目的を持ったまま同じ場所にいられること。そのための条件が保たれているとき、場所には公共性が生まれる。

③ ところが、異なる目的が同じ場所に集まれば、衝突も起こる。子どもが遊ぶ声と、静かに休みたい人の願い。通り抜きたい人と、その場に立ち止まりたい人。飲食を楽しみたい人と、清潔さを保ちたい人。どの願いにも理由があっても、一つをそのまま通せば、別の人の利用を難しくすることがある。

④ そこで、公共空間には規則が作られる。「ここでは走らない」「長時間の利用を控える」「決められた場所以外では飲食しない」といった規則は、安全や清潔さ、利用の公平を守るとうとする。しかし、規則は利用を可能にする一方で、ある利用の仕方を外へ押し出す働きも持つ。座る時間を短くすれば多くの人が使えるが、長く休む必要がある人は居場所を失うかもしれない。

⑤ 問題は、規則があること自体ではない。安全のために、どうしても制限が必要な場合はある。注意したいのは、規則が同じ言葉で全員に示されていれば、それだけで中立的だと思ってしまうことである。同じ制限でも、少し不便になるだけの人と、その場所をほとんど使えなくなる人とがいる。規則の平等さと、負担の平等さは同じではない。

⑥ 空間の作り方にも、見えにくい選別が含まれる。腰かける場所が短時間の利用だけを想定している。利用登録に、住所や機器が必要になる。何かを買う人だけが長く滞在できる。どれも明確に「あなたは入れない」とは言わないが、設計が思い描く利用者像に合わない人は、少しずつその場から遠ざけられる。

⑦ 一方、制限をすべてなくせば公共性が高まるとも限らない。大きな音や危険な行為を放置すれば、声の大きい人や力のある人だけが場所を占めることもある。何も決めないことは、誰も排除しないことと同じではない。公共性には、自由を守るために必要な制限と、制限によって失われる利用との両方を見る視点が要る。

⑧ 公共的であるとは、衝突がない状態ではなく、異なる人を同じ検討の枠から外さないことである。誰の安全を守るのか。誰にどれほどの負担が生じるのか。ほかに方法はないのか。規則を作る前にも、作ったあとにも、こうした問いを続ける。最初の決定が完全でないと認め、利用の実態に応じて見直せることが大切になる。検討の場に姿を見せない人のことにも注意が要る。会議の時刻に参加できない人、意見を述べる方法を知らない人、すでに使いにくさを感じて立ち去った人は、声がないように見える。だが、発言が聞こえないことは、困りごとが存在しないことを意味しない。現場を観察したり、複数の方法で意見を受けたりして、まだ届いていない声を探す必要がある。集まった意見の数だけで多数を決めるのではなく、なぜ声を届けやすい人と届けにくい人がいるのかも確かめたい。意見を聞く方法そのものが、すでに公共空間への入口の一部だからである。

⑨ もちろん、すべての希望を同時に満たすことはできない。それでも、制限の目的を説明し、必要以上に広げず、使えなくなる人には別の方法や場所を用意することはできる。決定に関わる声が偏っていないかを確かめ、一定の期間のあとで効果と負担を見直すこともできる。公共性は、一度決めた正しい形ではなく、調整を続ける仕組みに宿る。

⑩ 広場のベンチは、そこに置かれているだけでは公共的にならない。どのような人を利用者として想像し、異なる過ごし方をどこまで同じ風景に含められるかによって、その意味は変わる。公共空間は、物としての場所であると同時に、知らない他者と場所を分け合う関係である。「自分が使えるか」だけでなく、「誰が使いにくくなっているか」を考える想像力が、その関係を支えている。

設問

問一 語句・表現

次の(一) (二)について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第五段落「それだけで中立的だと思ってしまう」の「中立的」の意味

ア 規則の目的が明確で、利用者全員が喜んで受け入れること

イ 規則が管理する側にも利用する側にも、まったく影響を与えないこと

ウ 規則が誰にも偏らず、すべての人へ同じように働くこと

エ 規則が安全よりも自由を優先し、制限をできるだけ減らすこと

(二) 第八段落「異なる人を同じ検討の枠から外さない」の意味

ア 利用者の希望をすべて同じ内容にそろえ、対立が起こらないようにすること

イ 規則を考えると、負担を受ける人を含む異なる立場を検討の対象に残すこと

ウ 一度決めた規則を全員へ同じ形で適用し、例外を一切設けないこと

エ 公共空間を利用できる人を、話し合いに参加した人だけに限ること

解答 (1) [] (2) []

問二 筆者の主張

本文における公共性の捉え方として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 公共性は、規則をなくして利用者の自由を最大にしたときに初めて成立する。

イ 公共性は、国や自治体が場所を所有しているという事実だけで保証される。

ウ 公共性を守るには、最も多い利用者の快適さを基準に規則を固定すべきである。

エ 公共性は、異なる立場を検討に含め、規則の目的と負担を確かめて調整し続ける過程にある。

解答 []

問三 文章構成

本文の論の展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 公共空間の定義 | 利用の衝突と規則の両面 | 無制限な自由への留保 | 見直し続ける公共性

イ 広場の歴史 ― 規則が増えた原因 ― 公共施設の民営化 ― 新しい施設の提案
ウ 利用者の不満 ― 管理者への批判 ― 規則の全面廃止 ― 自由な空間の実現
エ 公共空間の所有者 ― 安全を守る規則 ― 規則に従わない人の排除 ― 秩序の回復

解答 「 」

問四 短い記述（60字以内）

同じ規則を全員に示しても、負担が平等になるとは限らないのはなぜか。本文に即して60字以内で説明せよ。

手がかり 第五段落から、規則によって少し不便になると、ほとんど使えなくなる人を比べる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（90字以内）

筆者が公共空間を支えるために必要だと考える「想像力」とはどのようなものか。本文全体に即して90字以内で説明せよ。

手がかり 誰を想像するか、規則について何を問い、決定後に何をするかをつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

解答・解説

本文の流れ

第一・第二段落 公共空間を、異なる目的を持つ他者が同じ場所にいられる条件として捉える。
第三～第五段落 利用者の願いの衝突と、規則が可能性と排除の両方を生むことを示す。
第六・第七段落 設計による見えにくい選別と、無制限な自由にも排除が生じうることを述べる。

第八～第十段落 異なる人を検討から外さず、目的・負担・代替案を見直し続ける公共性を提案する。

問一 語句・表現

(1) 正答 ウ

根拠 第五段落では、同じ言葉で全員に示されても、人によって負担が異なると続く。

解説 ここでの「中立的」は、特定の人に有利・不利にならず、同じ働きをするという意味で使われている。

誤答のずれ アは全員の賛成、イは影響がないこと、エは自由を優先する方針へ意味を変えている。

(2) 正答 イ

根拠 第八段落では、誰の安全、誰の負担、ほかの方法を問い、利用の実態に応じて見直すことを述べる。

解説 同じ枠に入れるとは、希望を同じにすることではなく、異なる立場を判断の外へ追い出さないことである。

誤答のずれ アは違いを消す。ウは見直しを拒み、エは参加者だけに利用を限定している。

☆自己採点の観点

- ☐ 抽象語を、その後に続く負担や問いの具体例と照らしたか。
- ☐ 同じ扱いと、異なる立場を考慮することを区別したか。

問二 筆者の主張

正答 エ

根拠 第八・第九段落は、異なる人を検討から外さず、目的・負担・代替案を問い、決定後も見直すと述べる。

解説 本文は公共性を、所有や無制限な開放ではなく、異なる利用を調整し続ける関係と仕組みとして捉える。

誤答のずれ アは第七段落が退ける。イは第二段落の定義より狭い。ウは少数の負担を検討から外し、見直しも止めている。

☆自己採点の観点

- 公共性を場所の所有や入口の開放だけで判断していないか。
- 一度の正しい決定ではなく、見直しを含む過程として捉えたか。

問三 文章構成

正答 ア

根拠 本文は定義から始まり、規則の必要性和排除、無規則の問題を経て、調整と見直しへ進む。

解説 規則を否定するのではなく、その両面を見たうえで、異なる立場を含む手続へ結論を移す流れである。

誤答のずれ イの歴史・民営化、ウの全面廃止、エの違反者排除はいずれも本文の構成にない。

☆自己採点の観点

- 規則の必要性和危うさの両方を経て結論へ進む流れを追ったか。
- 具体例に含まれる語だけで、本文にない歴史や政策を補っていないか。

問四 短い記述（60字以内）

設問の意図 形式上同じ適用と、実際の利用可能性への異なる影響を区別する。

根拠 第五段落の「同じ制限でも、少し不便になるだけの人と、その場所をほとんど使えなくなる人」。

必要要素 ①規則の文言・適用は同じである。②人の事情によって利用への影響の大きさが違う。

組み立て方 「同じ制限でも、～によって～が異なるから」とまとめる。

模範解答 同じ制限でも、利用する目的や置かれた事情によって、少し不便になる人と場所をほとんど使えなくなる人がいるから。(54字)

別解例① 規則の文言が同じでも、人によってその場所を必要とする度合いや代わりの手段が違い、利用への影響に差が出るから。(54字)

別解例② 全員に同じ規則を適用しても、事情や必要性の違いにより、受ける不便の大きさや場所を使える範囲が異なるため。(52字)

☆自己採点の観点

- 規則が同じであることを認めたうえで、影響の違いを書いたか。
- 事情・必要性と、利用しにくさの大きさをつないだか。
- 「不公平だから」だけで終わらず、60字以内で理由を示したか。

答案で注意したい点 「人によって感じ方が違う」だけでは、利用できる範囲の差が見えない。実際の負担に触れる。

問五 要旨(90字以内)

設問の意図 他者への想像を感情的な思いやりに狭めず、規則の設計・代替案・見直しに結びつける。

根拠 第八・第九段落の問いと見直し、最終段落の「誰が使いにくなっているか」。

必要要素 ①異なる利用者と見えにくい負担を考える。②制限の目的と必要性、代替案を問う。

③実態に応じて見直す。

組み立て方 「～を想像し、～を問い、～する力」と三つの働きを並べる。

模範解答 異なる目的や事情を持つ利用者と、規則による負担を想像し、制限の目的や代替案を問い、決定後も利用の実態に応じて見直していく力。(62字)

別解例① 自分が使えるかだけでなく、誰が使いにくなるかを考え、安全を守る制限が必要以上に広くないか、別の方法はないかを問い続ける力。(62字)

別解例②

場所を共有する異なる人を判断の外へ出さず、規則が誰にどの負担を生むかを確かめ、説明・代替・見直しによって調整を続ける力。(60字)

☆自己採点の観点

- 自分と異なる利用者や、見えにくい負担を含めたか。
- 規則をなくすだけでなく、目的・必要性・代替案を問う力を書いたか。
- 決定後の見直しまで、60字以内で一つの説明にまとめたか。

答案で注意したい点 「他者を思いやる力」だけでは、公共空間の規則をどう扱うかが抜ける。問いと見直しまで具体化する。

第八章の学び 公共性は、誰も制限されない状態ではない。異なる利用者を判断の外へ出さず、規則の目的と負担を確かめ、直し続ける過程にある。

第九章 「努力は報われる」のか

この章で身につける力 努力と結果の因果を単純化せず、結果・条件・過程の価値を分けて関係づける。

① 「努力すれば報われる」という言葉は、何かに挑む人を励ます。今の行動が未来につながると感じられれば、苦しい練習や学習にも意味を見いだしやすい。自分には何も変えられないと思うとき、この言葉は、もう一度手を動かす力を与える。

② しかし、この言葉を「努力した人には、望んだ結果が必ず与えられる」という約束として受け取ると、現実とのずれが生じる。同じ試験を受ける二人が同じ時間勉強しても、以前に学んだ内容、使える資料、相談できる相手、体調、当日の問題との相性などは同じではない。結果には、本人が動かせる条件と、すぐには動かせない条件の両方が関わる。

③ 努力は、結果が生じる可能性を高めることはできる。練習によって技能が上がり、準備によって失敗を減らせるからである。だが、可能性を高めることと、結果を命令することは違う。努力は結果に影響する一つの要因であって、結果を一人で支配する力ではない。

④ この区別を忘れると、成功した人は努力した人、失敗した人は努力しなかった人だという判断が生まれる。そして、その判断を根拠に「努力したから成功した」「失敗したのだから努力が足りなかった」と説明する。結果から努力を推測し、その推測で同じ結果を説明するなら、考えは輪の中を回るだけで、環境や偶然を確かめることができない。

⑤ さらに、結果をその人の価値の証明にすると、成功は人格の優秀さ、失敗は人格の不足として扱われやすい。けれど、選考の結果が示すのは、ある基準と時点で選ばれたかどうかである。それは大切な結果ではあっても、その人が費やした時間や、別の場面で持つ力まで一度に測るものではない。

⑥ 家庭や学校、社会の条件に目を向けることは、本人の努力を否定することではない。むしろ、努力が力を発揮しやすい環境を考えるために必要である。静かに学べる場所、質問できる相手、やり直せる機会があれば、同じ人の努力でも届く範囲は変わる。条件を語ることは言い訳ではなく、支援できる場所を見つけることである。また、外から見える練習時間

だけで、努力の大きさを比べることも難しい。ある人には短い一時間でも、別の人には生活上の役割を調整してようやく確保した一時間かもしれない。費やした量だけでなく、その人がどのような条件の中で方法を選び、修正したかを見ると、努力への理解はより具体的になる。条件の違いを知ることが、努力を軽く扱うことなく、努力が届く道を増やすことにつながる。

⑦ では、結果を保証できないなら、努力には意味がないのだろうか。この結論もまた早い。努力は結果へ影響するだけでなく、技能、知識、物事の進め方、自分に合う方法への理解を残す場合がある。目標に届かなかったとしても、次の選択に使えるものが残することはある。

⑧ ただし、「過程に意味がある」と言っ、すべての努力を美しく語ることに注意したい。続けることで心身を大きく損なう努力や、方法が目的に合っていない努力まで、我慢して続ける必要はない。努力を尊ぶことには、休むこと、方法を変えること、目標から離れることを認める視点も含まれる。

⑨ 結果と過程は、どちらか一方だけを評価すればよいものではない。選抜や競技では結果が基準になる場面がある。一方、次にどう進むかを考えるには、どの方法が働き、どこで条件に阻まれ、何を変えられるかを見る必要がある。結果は到達点を示し、過程は次の行動を考える材料を示す。

⑩ 人を励ますときにも、「これだけ努力したのだから必ず成功する」と約束する必要はない。続けてきた工夫、失敗後の修正、助けを求めた判断など、実際に行ったことを具体的に認めることができる。そして、望む結果に届かなかったときには、本人の価値を否定せず、条件と方法と一緒に見直すことができる。

⑪ 「努力は報われる」という言葉を、未来の保証としてではなく、行動によって可能性を動かせるという励ましとして受け取るなら、その言葉は力を保てる。同時に、結果には環境や偶然も関わると知れば、報われなかった人を努力不足だけで裁かずにする。努力を大切にする社会とは、成功者だけをたたえる社会ではない。努力が働く条件を整え、結果だけでは見えない過程を丁寧に見る社会なのである。

設問

問一 表現の理解

最終段落「行動によって可能性を動かせる」の意味として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 努力を続ければ、環境や偶然に左右されず、望む結果を必ず得られる。

イ 努力は結果と無関係だが、本人が満足するための気持ちの支えにはなる。

ウ 努力は結果を保証しないが、技能や準備を通じて望む結果に近づく可能性を高められる。

エ 結果の可能性は生まれつき決まっているので、努力では変えることができない。

解答 「 ー 」

問二 論理の理解

第四段落で筆者が問題にする「輪の中を回る」考え方として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 成功を努力の証拠とし、その努力を再び成功の理由にすることで、ほかの条件を確かめない考え方

イ 努力の方法を何度も変えながら、結果に合う方法を探し続ける考え方

ウ 成功と失敗の両方を比べ、環境や偶然がどの程度関わったかを検討する考え方

エ 結果だけでなく過程も記録し、次の行動に使える情報を探す考え方

解答 「 ー 」

問三 文章構成

本文の論の展開として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 努力の否定 | 環境だけで結果が決まる説明 | 努力をやめる提案

イ 成功者の例 | 失敗者の例 | 努力量の比較 | 成功の条件

ウ 努力の価値 | 努力の美化 | 結果を評価しない立場 | 過程だけの重視

エ 努力が持つ励まし | 結果を保証しない理由 | 過程の価値への留保 | 条件を見ながら励ます結論

解答 「 」

問四 短い記述（65字以内）

筆者は、努力と結果の関係をどのように捉えているか。環境や偶然にも触れ、95字以内で説明せよ。

手がかり 第三段落の「可能性」と、第二段落の「本人が動かせない条件」をつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 要旨（90字以内）

筆者は、努力をどのように評価し、人をどのように励ますべきだと考えているか。本文全体に即して90字以内で説明せよ。

手がかり 結果・過程・条件の三点と、成功を保証しない励まし方をまとめる。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

挑戦問題 保証せずに励ます（110字以内）

大切な試験に向けて努力してきた人へ、結果を保証せず、努力も軽く扱わない言葉を110字以内で書け。本文の考えが伝わるようにせよ。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落 努力が人を励まし結果の可能性を高める一方、結果を保証はしないと区別する。

第四～第六段落 結果から努力や人格を逆算する判断を批判し、努力が働く条件へ目を向ける。

第七・第八段落 過程に残る価値を認めながら、努力の美化や継続の強制にも留保を置く。

第九～第十一段落 結果と過程を別の役割で評価し、保証せずに努力を励ます考えを示す。

問一 表現の理解

正答
ウ

根拠 第三段落では、努力は技能を上げ失敗を減らす、結果を支配する力ではないと述べる。

解説 「可能性を動かす」は、努力の因果的な働きを認めつつ、必然的な成功とは区別する表現である。

誤答のずれ アは可能性を保証へ強める。イは結果への影響を否定し、エは努力の働きそのものを否定する。

☆自己採点の観点

□ 「可能性を高める」と「必ず実現する」を区別したか。

□ 努力を無力とする選択肢にも、万能とする選択肢にも寄っていないか。

問二 論理の理解

正答
ア

根拠 第四段落は、結果から努力を推測し、その推測した努力で同じ結果を説明する構造を示している。

解説 同じ事実を根拠と結論の両方に用いるため、環境や偶然という別の説明を調べられない。

誤答のずれ イ・ウ・エはいずれも、新しい情報や比較によって考えを前へ進める方法であり、「輪の中」を表さない。

☆自己採点の観点

- 成功と努力のどちらが根拠で、どちらが結論になっているかを追ったか。
- 単なる繰り返しではなく、同じ結果を互いの証拠にする循環を捉えたか。

問三 文章構成

正答 エ

根拠 本文は努力の働きを認めて始まり、保証の誤り、環境と過程、努力の美化への注意を経て、条件付きの励ましへ進む。

解説 努力を肯定か否定かに単純化せず、その働きと限界の両方を保つ構成である。

誤答のずれ アは努力を否定し、イは事例比較に狭める。ウは本文が必要とする結果の評価を落としている。

☆自己採点の観点

- 筆者が努力を否定していないことと、美化もしていないことの両方を追ったか。
- 中盤の留保が、終盤の励まし方へどうつながるかを考えたか。

問四 短い記述（65字以内）

設問の意図 努力の因果的な働きを認めつつ、結果が複数要因で生じることを説明する。

根拠 第二・第三段落の、努力は結果へ影響する一要因だが、環境や当日の条件も関わるという部分。

必要要素 ①努力は技能や準備を通じて結果の可能性を高める。②環境や偶然も関わるため結果を保証しない。

組み立て方 「努力は～できるが、～も関わるため～できない」と逆接でつなぐ。

模範解答 努力は技能や準備を通じて望む結果の可能性を高められるが、環境や偶然など他の条件も関わるため、結果は保証できない。（56字）

別解例①

努力は結果に影響する重要な要因だが、以前の経験や使える支援、体調や偶然も作用するので、成功を一人で決める力ではない。（58字）

別解例② 練習や準備は失敗を減らし結果に近づける一方、本人が動かせない環境や偶然もあるため、努力だけで成否は決まらない。(55字)

☆自己採点の観点

- 努力が結果へ影響することを否定していないか。
- 環境や偶然が関わるため、保証にはならないと書いたか。
- 努力が環境かの二者択一にせず、60字以内で関係づけたか。

答案で注意したい点 「努力しても運次第」では、努力の働きを落とす。努力が何を変えられ、何までは支配できないかを示す。

問五 要旨(90字以内)

設問の意図 結果と過程の役割を分け、環境整備と具体的な承認を含む本文の結論を統合する。
根拠 第九・第十段落の結果と過程の役割、最終段落の条件を整え結果だけでは見えない過程を見るという結論。

必要要素 ①結果と過程を別の観点で見る。②環境・方法を見直す。③成功を保証せず具体的な工夫を認める。

組み立て方 「」を分けて評価し、を整えながら、を認める」とつなぐ。

模範解答 結果は到達点と受け止めつつ、それだけで人の価値を決めず、工夫や修正の過程と環境条件を見直し、成功を保証せず行った判断を具体的に認めて励ますべきだ。(73字)

別解例① 努力を成功の保証や人格の証明にせず、結果とともに方法や残った学びを見て、届かなかったときは本人を責めず条件を整え、工夫を言葉にして励ますべきだ。(72字)

別解例② 成否を大切な結果として評価しながらも、努力の方法や環境、次に残る学びを別に確かめ、必ず報われると約束せず、変えられる条件と行動を支えるべきである。(73字)

☆自己採点の観点

- 結果を無視せず、それだけで人の価値を決めないと書いたか。
- 過程の工夫と、努力が働く環境の両方に触れたか。
- 成功の保証ではない励まし方を90字以内で示したか。

答案で注意したい点 「結果より過程が大切だ」だけでは、本文が結果も必要とする点と、環境を整える視点が抜ける。

挑戦問題 保証せずに励ます

解答例 ここまで、苦手な部分を確かめて方法を変え、分からないときには助けを求めながら準備してきたことを知っている。結果を約束はできないが、その判断と積み重ねは確かに力になっている。終わったら、結果と過程と一緒に振り返ろう。(107字)

考え方 「必ず受かる」と言わず、見てきた具体的な行動を認め、結果後も本人の価値を切り離さない言葉にする。

☆自己採点の観点

- 成功を断定したり、失敗の可能性を本人の努力不足に結びつけたりしていないか。
- 工夫・修正・助けを求めたことなど、具体的な過程を認めたか。
- 結果のあとにも支える見通しを含め、110字以内にまとめたか。

第九章の学び 努力は結果の可能性を動かすが、結果を支配しない。成否から人の価値を逆算せず、過程と条件を見て次の行動を支える。

第十章 人間とは何か——孤独とつながりのあいだで

この章で身につける力 孤独とつながりを反対語として扱わず、理解の限界を引き受けながら関係を続ける人間像を統合する。

① 親しい友人に自分の気持ちを話し、「分かるよ」と言ってもらった。それだけで救われることはある。しかし同時に、本当に同じように分かってもらえたのだろうかという小さな疑問が残ることもある。どれほど丁寧に語っても、自分が経験した痛みや喜びを、そのまま相手の内側へ移すことはできない。

② ここでいう孤独は、周囲に人がいない状態だけを指さない。自分の感覚や記憶を、自分以外の人が完全に同じ形で経験することはできないという隔たりを指す。大勢の中にいても感じることもあり、一人でいても必ず苦しいとは限らない。孤独は、人数だけでは測れない。

③ 言葉は、この隔たりを越える橋になる。自分の内側にあるものを選び、順序をつけ、相手へ差し出せるからである。だが、橋を渡った言葉は、相手の経験の中で受け取られ、組み立て直される。言葉によって近づけることと、完全に同じになることは違う。むしろ言葉は、つながりを作ると同時に、残る距離も知らせる。

④ 完全に理解し合うことを関係の条件にすれば、私たちはたびたび失望する。自分を分かってくれない相手を遠ざけたり、相手の違いを自分の説明へ無理に押し込めたりするかもしれない。しかし、完全な理解が難しいからといって、関係が無意味になるわけでもない。分からない部分が残ると知ったうえで、問い返し、言い直し、近づこうとすることはできる。

⑤ つながるとは、相手との違いをなくすことではない。相手を自分の予想どおりの存在にせず、自分にはまだ見えない部分を持つ人として受け止めることである。「分かった」と早く閉じるより、「ここまでは分かったが、ここはまだ分からない」と言えるほうが、相手の場所を残す場合がある。

⑥ 孤独にも、区別すべき二つの面がある。望まないのに周囲から切り離され、助けを求めても届かない孤立は、人を深く苦しめる。一方、一人で考え、自分の感覚を聞き直す時間は、他者の期待だけで自分を決めないための余白になりうる。孤独を美化して孤立を放置してはならないが、一人でいることをすべて欠けた状態と見る必要もない。

⑦ つながりにについても、連絡の回数や知り合いの数だけでは測れない。いつでも返事が来ることと、困ったときに一人の人として扱われることは同じではない。多くの接点があっても、役割や便利さだけで見られていと感じれば、孤立感が残る。反対に、頻繁には会わなくても、違いを保ったまま話せる関係が支えになることもある。

⑧ この意味で、孤独とつながりは単純な反対語ではない。一人でいる力があるから、相手に自分のすべてを埋めてもらおうとせずには済むことがある。他者との関係があるから、一人で向き合うことの難しさを支えてもらえることもある。両者は互いを消すのではなく、条件によって支え合う。

⑨ 人間は、初めから完成した自己を持ち、それを他者へ見せるだけの存在でもない。相手の言葉に驚き、自分の考えを言い直し、知らなかった自分に気づく。関係の中で変わりながらも、相手と同じものにはならない。人は他者との間で自己を作り続けると同時に、最後まで相手に渡しきれない内面を持つ。

⑩ もちろん、関係はいつも人を成長させるとは限らない。私たちは誤解し、傷つけ、相手の言葉を自分に都合よく受け取ることがある。だからこそ、関係には責任が生じる。間違いを認め、説明を直し、必要なら距離を取り、もう一度話せる条件を整える。つながりの価値は、壊れないことではなく、壊れうるものをどう扱うかにも現れる。

⑪ 文章を読むことも、遠くにいる他者との関係に似ている。書き手の考えを完全に自分のものにするのではなく、言葉のつながりをたどり、自分の予想と違う箇所で立ち止まる。すぐに賛成か反対かを決めず、なぜその結論に至ったかを確かめる。読むことは、分らない他者を消さずに、その考えへ近づく練習なのである。

⑫ 人間とは何かという問いに、一つの定義で答えきけることは難しい。それでも、人間は、自分の内面を他者と完全には共有できない孤独を持ちながら、なお言葉を差し出し、理解を直し、関係を作ろうとする存在だと言えるだろう。完全に分かり合ったふりをせず、分か

らなさを理由にあきらめもしない。そのあいだで対話を続けるところに、人間の尊さと可能性がある。

設問

問一 語句・表現

次の(一) (二)について、本文の意味に最も合うものを、ア～エから一つずつ選べ。

(一) 第三段落「言葉は、つながりを作ると同時に、残る距離も知らせる」の意味

ア 言葉を使うほど、相手との考えの違いが大きくなり、関係は弱くなる。

イ 言葉で内面へ近づけても、相手の経験を完全に同じ形で共有することはできない。

ウ 言葉は気持ちを正確に写せないため、他者とつながる働きを持たない。

エ 親しい人との会話では距離がなくなるが、知らない人との会話では残り続ける。

(二) 第五段落「相手の場所を残す」の意味

ア 相手が一人になれるように、会話をやめて物理的に離れること

イ 自分の考えを伝えず、相手の言うことをすべてそのまま受け入れること

ウ 相手について理解しようとせず、分からないままにしておくこと

エ 相手を自分の理解で決めきらず、まだ見えていない違いや内面があると認めること

解答 (一) 「 」 (二) 「 」

問二 内容理解

本文における「孤独」と「つながり」の関係として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア つながりが十分に増えれば、人間の孤独は完全に消える。

イ 孤独は関係を妨げるだけなので、一人でいる時間はできるだけ減らすべきである。

ウ 孤独とつながりは互いを消すものではなく、一人でいる力と他者の支えが条件によって補い合う。

エ 孤独を受け入れられる人には他者との関係が不要になり、つながりから自由になれる。

解答 「 」

問三 本文の要旨

本文全体の要旨として最も適切なものを、ア～エから一つ選べ。

ア 人間は内面を完全には共有できない孤独を持つが、違いを消さずに理解を直し、他者との関係を作り続ける存在である。

イ 人間の孤独は言葉の不正確さから生じるため、より正確な表現を身につければ解消できる。

ウ 人間らしさは一人で自分を完成させ、他者の影響を受けずに生きる力にある。

エ 現代では人との接点が増えたので、孤独よりもつながりの過剰だけが問題になっている。

解答 「 」

問四 短い記述（65字以内）

筆者が、完全に理解し合うことを関係の条件にしないほうがよいと考えるのはなぜか。65字以内で説明せよ。

手がかり 第四・第五段落から、完全な理解を求める危険と、代わりにできることをつなぐ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

問五 統合記述（100字以内）

筆者が考える人間とはどのような存在か。「孤独」「つながり」の二語を用い、本文全体に即して100字以内で説明せよ。

解答欄 ここへ清書しても、ノート用の要点メモにしてもよい。

挑戦問題 読むことと他者理解（110字以内）

第十一段落を踏まえ、文章を読むことと、分からない他者に向き合うことにはどのような共通点があるか。110字以内で説明せよ。

解答欄 一つに定まる正解はありません。考えを整理するためのメモにも、まとめた文章の記入にも使えます。

解答・解説

本文の流れ

第一～第三段落 孤独を内面の隔たりとして捉え、言葉がつながりと距離の両方を生むと示す。
第四・第五段落 完全な理解を求めず、分からない部分を残して関係する姿勢を述べる。
第六～第八段落 孤立と一人の時間、接点と関係を区別し、孤独とつながりが支え合う面を示す。

第九～第十二段落 人は他者との間で変わり、誤解を直しながら対話続ける存在だとまとめる。

問一 語句・表現

(1) 正答 イ

根拠 第三段落は、言葉が橋になる一方、相手の経験の中で組み立て直され、「完全に同じになること」とは違うと述べる。

解説 言葉の力を認めながら、完全な共有まではできないという限界も同時に示す表現である。

誤答のずれ アは距離が必ず大きくなるとする。ウはつながりの働きを否定し、エは親しさによって完全共有が可能になるとしている。

(2) 正答 エ

根拠 第五段落では、相手を予想どおりの存在にせず、「まだ分からない」と言えることが相手の場所を残すと述べる。

解説 場所は物理的な空間ではなく、相手が自分とは異なる存在であり続ける余地を表す。
誤答のずれ アは物理的距離に置き換える。イは自分の判断を放棄し、ウは理解へ近づく努力までやめている。

☆自己採点の観点

□ 言葉の力と限界のどちらか一方だけで選んでいないか。

□ 比喩的な「距離」「場所」を、他者の違いを残す関係として読んだか。

問二 内容理解

正答
ウ

根拠 第八段落では、一人でいる力が関係を支え、他者との関係が一人で向き合う難しさを支えることもあると述べる。

解説 本文は二つを単純な反対語とせず、互いを残したまま支え合う可能性を示している。

誤答のずれ アは孤独の完全な解消、イは一人の時間の全面否定、エは関係の不要化へ強めている。

☆自己採点の観点

□ 孤立と一人でいる時間、接点の多さと関係の深さを区別したか。

□ 孤独かつながりかの二者択一になっていないか。

問三 本文の要旨

正答
ア

根拠 最終段落は、完全には共有できない孤独を持ちながら、言葉を差し出し、理解を直し、関係を作る存在とまとめる。

解説 孤独の限界と、対話を続ける可能性の両方を含むアが本文全体に対応する。

誤答のずれ イは孤独を言葉の技術だけの問題にする。ウは他者との変化を否定し、エは本文の論点を現代の接点だけに狭める。

☆自己採点の観点

□ 孤独とつながりの両方を含む選択肢を選んだか。

□ 本文の一部である言葉や現代の接点を、全体の原因・結論へ広げていないか。

問四 短い記述（65字以内）

設問の意図 理解の限界を認めることが、関係の放棄ではなく、他者の違いを保つ対話につながると説明する。

根拠 第四段落の失望・遠ざけ・押し込みと、第五段落の「まだ分からない」と相手の場所を残すこと。

必要要素 ①完全理解を求めると相手の違いを否定しやすい。②限界を認めても問い返し、言い直して近づける。

組み立て方 「くするとくため、くを認めてくするほうがよい」とつなぐ。

模範解答 完全な理解を求めると、相手を遠ざけたり予想へ押し込めたりするため、違いを残して問い返し、理解を直すほうが関係を続けられるから。(63字)

別解例① 分かり合うことを絶対条件にすれば、違いを失敗として扱い相手を決めつけるので、分からなさを認めながら言い直し、近づく必要があるから。(65字)

別解例② 他者を完全に理解できると思うと、見えない部分まで説明で決めやすいため、限界を認めて相手の違いを残し、対話を続けるほうがよいから。(64字)

☆自己採点の観点

- 完全な理解を求めることで生じる危険を書いたか。
- 理解をあきらめるのではなく、問い返し・言い直し・対話へつないだか。
- 相手の違いを残すという中心を、95字以内で説明したか。

答案で注意したい点 「完全な理解は不可能だから」だけでは、関係をどうするかが抜ける。限界を認めたあとの対話まで書く。

問五 統合記述(100字以内)

設問の意図 内面の共有不可能性、他者との相互変化、誤解を直しながら対話を続けることを統合する。

根拠 第二・第三段落の隔たり、第八〜第十段落の相互作用と責任、最終段落の人間像。

必要要素 ①完全に共有できない内面という孤独を持つ。②他者とのつながりの中で自己を作り直す。③限界を認めて対話を続ける。

組み立て方 「孤独を持ちながら、つながりの中でくし、くを続ける存在」と一文にまとめる。

模範解答 人間は、自分の内面を他者と完全には共有できない孤独を持ちながら、言葉を差し出し、つながりの中で自分の理解を直し、違いを消さずに関係を作り続ける存在である。(77字)

別解例① 人間とは、最後まで渡しきれない内面という孤独を抱えつつ、なお他者とのつながりによって自分を作り直し、誤解や分からなさを認めながら対話を続ける存在である。(76字)

別解例②

人間は孤独による隔たりをなくせなくても、他者とのつながりを求め、問い返しや言い直しによって互いの違いを保ちながら、自己と関係を更新し続ける存在である。(75字)

☆自己採点の観点

- 「孤独」と「つながり」の二語を用いたか。
- 完全には共有できないことと、それでも関係を作ることを含めたか。
- 他者との間で理解や自己を直す人間像を、100字以内で統合したか。

答案で注意したい点 「孤独だがつながりを求める存在」だけでは、二つを並べただけになる。理解を直し、違いを残して関係する働きを加える。

挑戦問題 読むことと他者理解

解答例 どちらも、相手を自分の予想へすぐ当てはめず、言葉のつながりをたどって、なぜその考えに至ったかを確かめる営みである。完全に分かったと決めず、違いが残る箇所で問い直しながら、相手の考えへ近づいていく点が共通する。(104字)

考え方 「分かる」ことの完成ではなく、自分の予想を保留し、根拠をたどって理解を直す過程に注目する。

☆自己採点の観点

- 文章と他者のどちらについても、自分の予想で決めつけないことを書いたか。
- 言葉や根拠をたどり、理解を直す過程を示したか。
- 完全な理解ではなく、違いを残して近づく共通点を110字以内でまとめたか。

第十章の学び 人間は完全には分かり合えない孤独を持つ。それでも違いを消さず、問い返し、理解を直し、つながりを作り続けるところに可能性がある。

おわりに

お疲れさまでした！

ここまで読み進めたあなたは、文章の中から答えの言葉を探すだけでなく、筆者がどのような関係を組み立て、どこで考えを広げたかを追えるようになっていくはずですよ。記述問題では、模範解答と一字一句同じである必要はありません。大切なのは、本文の根拠を持ち、必要な要素を選び、その関係を崩さずに自分の一文へ結ぶことです。

うまく書けなかった問題も、失敗ではありません。どの根拠を見落としたか、どの言葉が広すぎたかを確かめれば、それは次の読解を支える具体的な手がかりになるでしょう。

文章を読むことは、自分とは異なる見方を、その違いを保ったまま受け取ろうとする練習でもあります。急いで賛成や反対を決める前に、相手の考えがどのように成り立っているかをたどる。その丁寧さを、これから出会う文章にも、人との対話にも生かしてください。